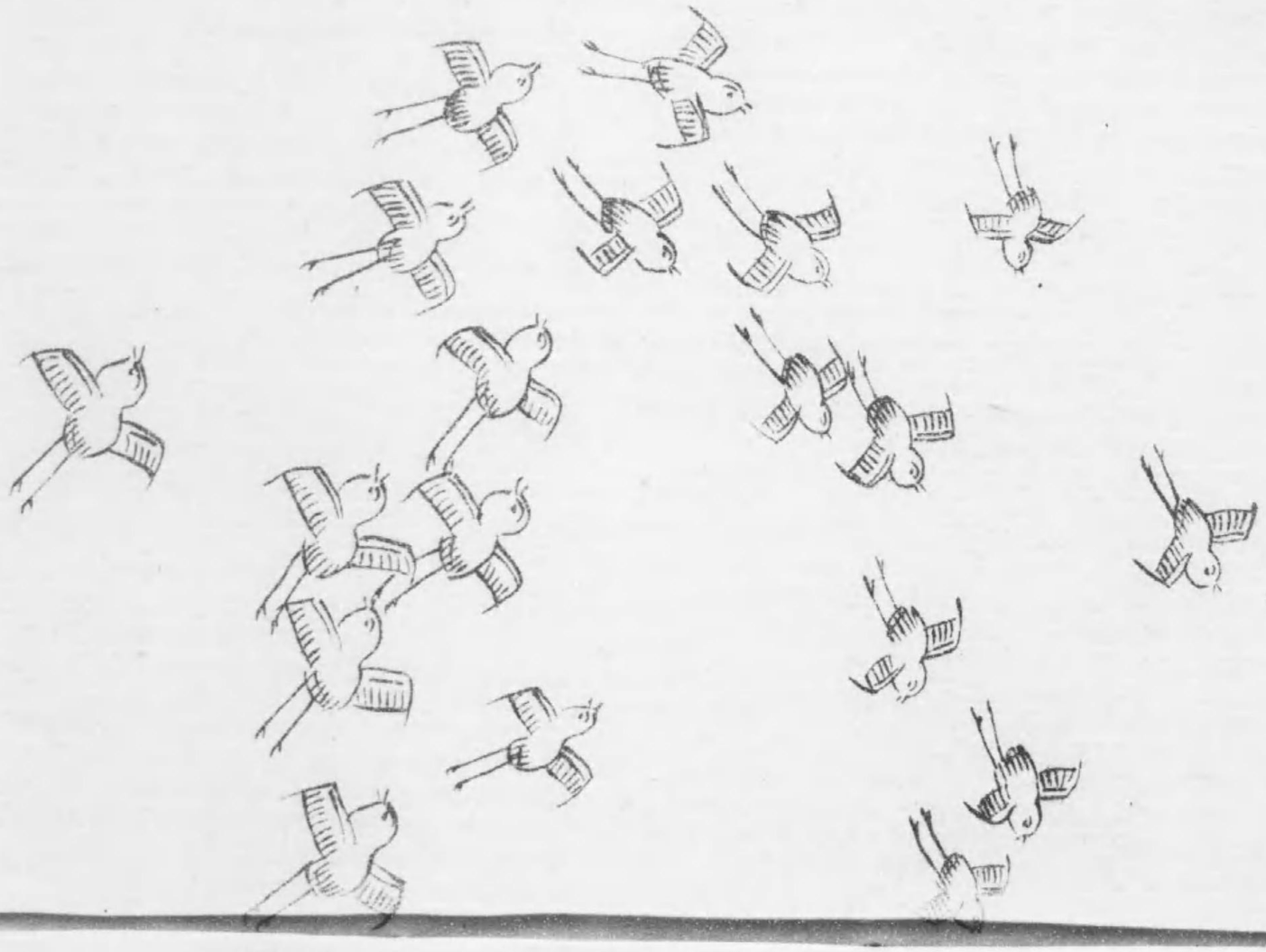
特116
709

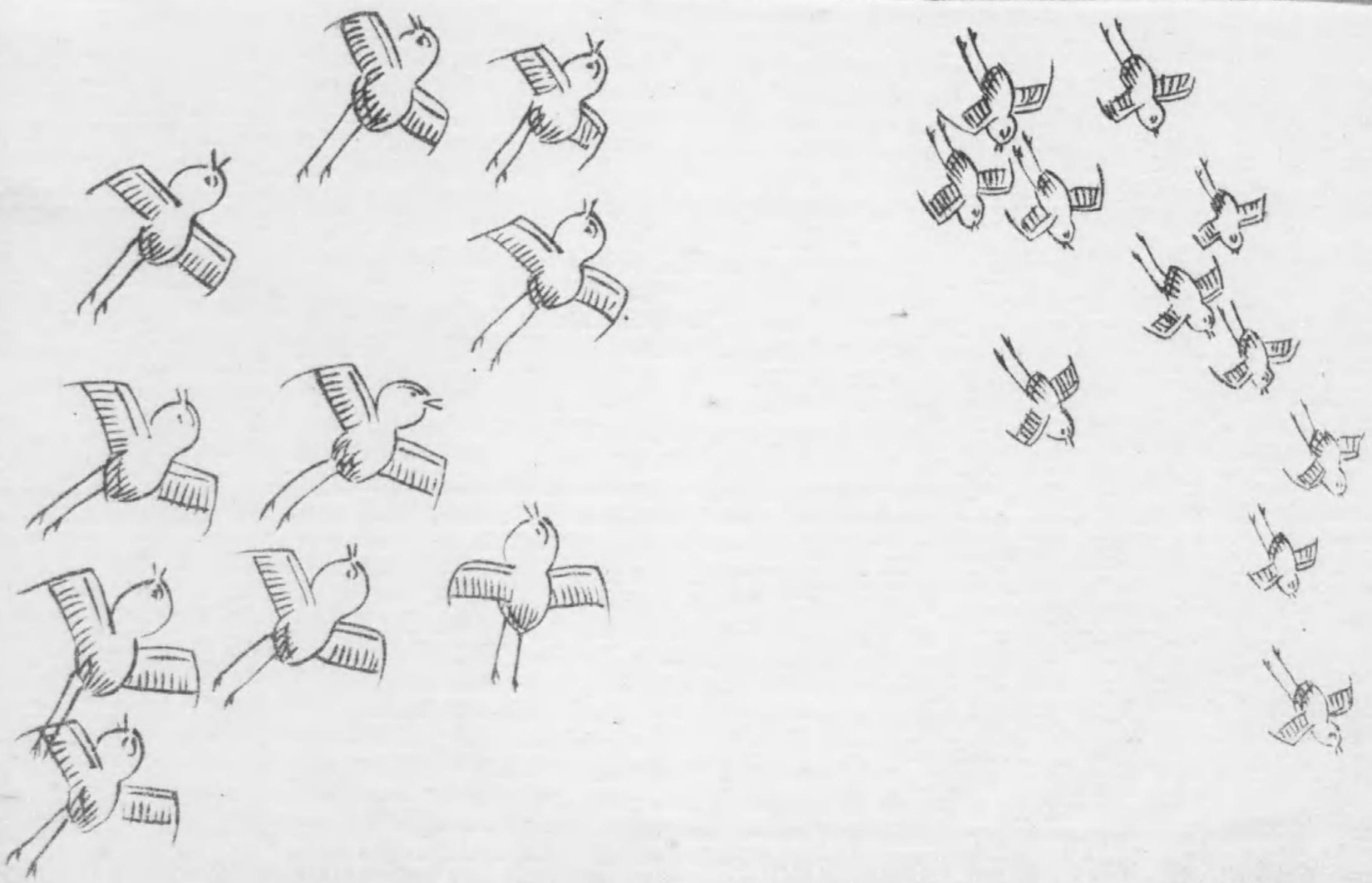
觀世流改訂謠本

内十二

海士
鞍馬天狗
定家
威陽宮
東岸居士

特116
709





觀清之

大正
10 8.25
内交

文學博士

明治四十年

井上頼圀 本文監修
丸岡桂 本文訂正
観世清之 節附訂正

大正五年

丸岡桂 解説并補訂
山崎楽堂 拍子附訂正
観世流改訂本刊行會 節附様式統一

大正十年

山崎楽堂 拍子附再訂正

海士

解題

藤原房前、傍臣の詞によりて其生母が讃岐志度浦の海人なることを知り、其古蹟を弔ひて亡霊に逢ふことを作れり。曲名を海人、白水郎、蜑とも書く。世子六平以後申楽談儀に、「あらなつかしのあま人やと涙を流し給へば。此涙の節、金春が節也。あまりに皆々しきことをば、ながくかきのせず。同じ能に、乳の下を掻いかり玉をおしこめなどのかゝりは、黒がしらにて軽々と出でたちて、こはたらきの風體也。女などに似合はず」など記せり。禅鳳習道目録に曲名見ゆ。二百十番謡目録に世阿弥作とあり。能本作者註文には世阿弥作として掲げたれど「是は別作と云説あり」と原註あり。前記申楽談儀の記事と、同書の他所に記録無きことを思ひ合はすれば世阿弥以外の作と見ること當れりに類かるべし。永正二年四月栗田口勧進申楽の第三日目に演ぜらる。

謡ひ方梗概

品位に重きを措かず、筋の運びに意を留めて、さして優しくなろやう、又重くならぬやう、強て聊か強みを含むを宜しとす。

シテ 前は賤しき海人と

いふと心に持ちて、女なれども優しみを附けず、精荒みたる體にあるべし。**出の一声**は位普通にして温やかに謡ひ、**サシ**は氣を更ってやゝ運びを付け、「げにや名に負ふ」と吟変りを強く高からぬやうに続け、**下歌**にて後やかにす。通じて寂びを持ち、涙手にならぬやう心すべし。**ワキとの問答**は常の女よりも低めにとりて確りと扱ひ、地謡と前「かづき上げしも此浦の」と心してかゝる。再び**問答**に入り、扱ひは前と同じく、中に就きて「今の大臣淡海公の御妹は」云々の一節、謡めきたる處なれば特に心して確りと謡ふべし。「さらばそと學うで」は軽やかに出、「其時海士人申すやう」と精静に、以下前とは心持を更へ、「偖は我が子伊勢に捨てん命」と確り「其時人々」より順次に氣を掛け行き、「一つの利剣を抜き持つて」と音の締まり好く、かつて謡ひ地へ渡す。「かくて浮かみは出でたれども」云々は前の地との移りに心をつけ、静にして運びは緒さらりめなるべく、工夫專一の処なり。**ロ**は前と変りて爽やかに確りとあるべし。**出**の「あらありがたの云々」はサシの調子にて節を大きく、勢有りて謡ひ、成佛を喜ぶ心にて晴れ〳〵とあるべく、以下地との掛合、青の開会に注意して些の勉みなく精厳に承け流し、舞後の「今此經の德用に」は確りと扱ふ。

子方 大臣なれど能にては子方にて勤むる故、強く大人びたるは悪しく、少し調子高にさらりとあるが宜し。「みづからも大臣の」云々は クリの調子にて高めに、「ある時」以下は クドキの調子にて多少心入れあるべく、「偖は亡母の手跡かと」は文を披見する心にさらりと謡ひ、「男はぬ旅に」云々と下歌の調子にて緒ゆるやかに、上歌は暢びて淀みなくあるべし。シテとの問答は荒々しくならぬやう注意す。「暫く」前は海中へ入らんとするを止むるなれば其心して

ワキ 次第、サシ共に健にさらりと扱ふ。

雅りと出づ。ワキツレは好く重ワキに徑ひて謡ふべし。

地 和の「天満つ月も」は地次第なれば、前よりも音を稍下に取りて寛りと謡ひ、「よしそれとても」の上歌は稍高めに出で、「さらでも」云々はシテの気を承けて附け、温やかに扱ひ、「やる貴人の」より**クセ**と心得て出を少しく静に、順次さらりと謡ひ行くべし。尤も此出は別に謡を更へず。「彼の海底に飛び入れば」以下玉之段は一曲中最も爽快の趣ある處、十分に謡を緊張して勢好く氣を掛けて出、「取りえん事は不定なり」と少しく鎮め、以下稍緩やかに謡ひ行き、「手を合はせ」と落にて又氣合を掛け、「南無や志度寺の」より勢好く進み、「引き上げたりけり」の「けり」にて緩め、其後を鎮めて止む。「此事の跡を」云々は更へて少しく下に取り、静に確りと出で餘情あるやうに謡ひ納むべし。後の「さては疑ふ所なし」は前の調子を外してすらりと扱ひ、「寂莫無人聲」は別に起し、一声の調子にて大きく謡ふ。後はシテとの掛合、字音に心を用ひて耳を立たねやう鄭重に扱ひ、キリは晴れ〳〵とあるべし。

注意すべき謡ひ方

辭解

出づるぞ名殘云々 三日月は出でゝ間もなく入るものなれば、出づるや直に名殘なりとの意にて續る。月を受けて月の都と續け、月の落つる方の西に急ぐシテの詞の中、面向不背の玉の開きは面向と不背との間の別れ〳〵にならぬやう心し、耳立たねやうにそつと音を起す。此扱ひ方を開き無しとも云ふ。

天地の開けし惠み 天地開闢以来神の惠みの久しと云ひ掛く。

房前の大臣 藤原不比等の子。文武より聖武の名朝に仕へし天平時代の人。黄金二一位左大臣を追贈せられ更に太政大臣を贈らる。志度寺縁起に出崇峻帝霊木に感得して観音を造立せられ藤原不比等房前興隆すとあり。此曲は之と基とし、光明天皇の淡路島に獵し給つる時、一海人が腰に縄をつけて真珠を取り来りし故事を取合せて作りし、大織冠物語といふ古き物語より取りたりと云つり。その物語は傳はらざれども、それより出でたりと思しき幸若の謡「大織冠」あり。珠の故事により後世玉の浦と呼びたれども、これは和名抄に出でたる多和浦の轉訛なり。

志度の浦 讃岐國大川郡にあり。此曲に作られたる寶物

房崎 志度浦の邊の總名。

追善 死者の冥福を祈る佛事。

旅に奈良坂や 馴れぬ旅に馴るゝ意にて奈良坂に掛く。奈良坂は奈良に入る坂路。非ず。敢るに云ひ掛く。

今ぞ榮えん此岸の 新古今集に「此歌は興福寺の南圓堂つくりはじめ侍りける時春日のえのもとの明神よみ給ひけるとなむ」と詞書して

みかさの山 奈良にあり。春日山の別稱。今俗に三笠山と稱する小山に

「補陀落のみなみの岸に堂たて、今ぞさかえん北の藤なみ」とあり。源平盛衰記に此歌を載せて、「北の藤なみと申すは淡海公の御子に南家(武智麻呂)北家(房前)式家(宇合)京家(麻呂)とて四人の公達おはせけり。何れも藤氏なれども、次男にて北家房前の御末の繁昌し給ふべきの歌也」云々。

日の本の南の海 引歌の南の岸を轉用して南海道を呼び起す。

津の國 攝津の古名。

こや 攝津に昆陽(こや)と云ふ地名あるを引きて「これや」の意に用ひ、伊勢物語、伊勢國と云ふ。

鳴門 阿波國と淡路國との間にある瀬戸。東近く成ると掛く。拾葉抄に「誰ぞこの鳴門の沖に音するは海士の釣舟」とよめる歌を引きなりと云ふ。

海士の刈る云々 古今集に「あまの刈る藻に住む蟲のわれからとねをぞなくなるかなしき」とよめる歌を引きなりと云ふ。

寺近けれど 志度寺は近けれど是は心なき海士なりと云ひかけてあまの〻里に續けたり。

流れ蘆 流れ寄る蘆。真節(よ)を世にかけ、これも世を渡る業なれば心無しとは云ひかたき海士ぞと、前に心なき海士といへるを打ち消して云つり。

慰みも名のみ なぐさみも無しと云ひ掛く。

何をみるめ 何と見んとの意をみるめ(海草の名)に掛く。

わこと そなた。

かづきの海士 水に潜りて貝など取る海士。

雲の上人 殿上人。

御諚 御詞

明珠 光明にして曇りなき玉。

龍宮 海中の龍王の宮殿。

天満つ月 海士の音を受く、天に光の満ちたる月。

靳珠島 志度寺縁起に出づ。源平盛衰記に「興福寺は是淡海公の御願、藤氏累代の氏寺也。(平景)中金堂と申すは(平景)皇極天皇豊聚殿しして丈六釋迦の三尊を造主せらるゝ也。眉間の水精は唐國より渡されたり。此玉左に見るにも右に見るにも釋迦三尊の影うるはしく映りし玉也」云々。又帝王編年記に「康和三年五月四日興福寺燒亡。金堂佛眉間玉中小佛、自度中奉取出」云々。仲眉間玉之中、有釋迦

面向不背の玉 開きは面向と不背との間の別れ〳〵にならぬ音を起す。此扱ひ方を開き無しとも云ふ。

天の兒屋根の御讓 天に冠する枕詞。

像、玉中無可入之口、希有事由、佛師空朝所作也」云々。此興福寺の佛像の **漢朝** 支那の朝廷。 **淡海** 層間に入れられたる水精の玉が、ここに云へる面向不背の玉なるべ――。 **公** 藤原不比等（鎌足の第二子）。 **高宗皇帝** 唐の第二世皇帝。淡海公の妹其后に立ちたりとは作者の假に作れることなり。 **氏寺** 其氏族の冥福を祈る寺。 **興福寺** 始、藤原鎌足が山城宇治の私第に山階寺を草創せしを、天武天皇の時大和高市に移して厩坂寺と云ひ、元明天皇の時奈良に移して興福寺と云へり。藤原氏の氏寺。 **華原磬、泗濱石** 華原といふ處より產する玉石を以て作りし樂器と、泗濱より出づる石の樂器と。白氏文集に「華原磬華原磬、古人不聽今人聽」など見え又杜佑の通典に「泗濱石可爲磬、近代出自華原」とも見ゆ。何れも名は傳はれども實物明ならず。且つ興福寺に関する古記に華原磬泗濱石の名傳はらざるは、是も謠曲作者の假作かと思はる。此作者は高宗皇帝の后を藤原不比等の妹となすが如き大膽なる創意を加へ居ることなれば虞より三寶を贈れりと作れるが如きは深く怪むに足らず。ことに大部なる白氏文集中、華原磬の詩が後に引かれたる海漫々の詩の次に出でたるなど思い合すれば新く斷ずるが當れるに近からん。今興福寺に鎮銅華原磬と稱する一基の金數を存し、國寶の中に列せられ居れども、これは美術工藝品にして華原磬の名當らず。恐らくは謠曲以後に後人の命名したるなるべし。 **藤の門** 藤原氏一門の意。蔭の縁にて、心にかゝると續く。 **房前のあまり** 房前の海士と云ひかけて謠を始ず。 **幣木** 信濃國國原の伊原にありし幣木（幣に似たる寄生木）、遠くより見れば在りと見えながら近づけば見ること能はずとて歌によまれたるが古今六帖及び新古今集に出づ。それを胸に置きて幣木の謠を母の意に用ひ、おぼつかなき遠路を尋ね來れる心に通はせたり。 **暫し宿る** 月の水主の露に宿ると奉き海士の胎内に宿ると兼ぬ。 **雨露の恩** 幣木と云へる縁にて源順の賦の句「草樹皆蒙雨露之恩」を引く。親の恩の意。 **さらでも** さなくとも。 **一世ならず** 前世よりの因縁との意。 **潦** 雨水の池上に溜り流るゝ水。 **光陰を惜まず** 光を惜まずと云ふ。大臣を日月に譬へ海士に喻ふ。 **事もおろかや** 云ふまでもなき我の意。 **ゆかりに似たり** 法海公の縁故ある人に似たりとの意。紫をゆかりの色とよぶより次に藤咲く門（藤原氏の意）と續け、更に其縁にて口を開づといつり。 **わが主** 水島の鷺舞をいひかけて御主と続く。房前を さす。 **朽たすまじ** 名を朽ちさすまじ。 **そと學らで** そつと真似して。 **世繼** 相續。 **領承** 承諾。

千尋の繩 何丈となく長き繩。 **利劒** するどき劒。 **雲の波煙の波** 以下白氏文集の「海漫々、直下無底傍無邊、雲濤烟浪最險處、人傳中有神仙居」を取る。漫々は廣大なる貌。 **神變** 神のなす變事。 **玉塔** 寶玉を以て造れる塔。 **香花** 香と花と。 **八龍** 難陀、跋難陀、娑迦羅、和修吉、德叉迦、阿那婆達多、摩那斯、優鉢羅の八大龍王。 **其外惡魚鰐** 八龍の外に、惡魚鰐なども美び居るを云ひ、鰐口といふ成語あるによりそれに掛け、其縁にて更に逃れ難しといふ。 **南無** 佛に向ひて救を請ふ意。 **志度寺の觀音菩薩** 志度寺の本尊十一面觀世音。 **大悲の利劒** 大慈は觀音の大慈悲心。法華經に「或遇惡羅刹、毒龍諸鬼等、念彼觀音力、時惡不敢害」など出づるにより觀音の擁護と真の利劒とを兼ねていつり。 **龍宮のならひにこそ** 大海に死屍を宿さずといふる古說によりて作れる作者の假說。 **五體もつゞかず** 身體切れ裂けたるをいふ。 **主** 者人 **赫奕** 光りかゞやく貌。 **此筆の跡を** 海士の幽靈が己の手跡を與つて云ふなり。 **夜こそ** 波の寄るに掛く。 **あけてくやしき** 浦島の子の玉手箱の故事を引く。 **朝潮** 朝さす潮。契の淺かりしにかけたり。 **魂黃壤に出つて一十三年** 以下母なる海士の手跡の文。まづ死後十三年になれるをいふ。黃壤は黃泉の土、死後の世界。 **日月の算を經** 多年を經たる意。 **冥路杳々** 冥途のみちの暗きをいふ。 **冥闇を助けよ** 冥きに迷へるを救へとの意。 **花の蓮の妙經** 妙法蓮華經。草の緣にて花といふ。 **いろいろの善** 種々の善業。 **志ある** 志度寺の志を延べていつり。 **手向草** 手向をなす、樣々の獨在空閑處。寂寞無人聲。讀誦此經典。我爾時爲現清淨光明身」。經の句一句を出して讀經の意と四區の寂寞たる樣を敍するとを兼ねしむ。 **寂寞無人聲** 法華經法師品に「若說法之人提婆達多が記別を受けたる故事。提婆達多は天竺の人、調達とも名づく。解飯王の子、阿難の兄、釋迦の從弟にて甚弟子たりしが、或は石を擲ちて佛身を傷け、或は醉象を放ちて佛を踐ましめ、或は華色比丘尼を殺し、或は佛を害せんとしたる五逆罪によりて生きながら地獄に墮したり。當時人皆彼を極惡人となしたるが、佛、往昔彼によりて法華經を聞き、爲に今日成佛を得たるなれば、彼の惡は世人を誡むる惡とも見るべく、遠き未來に必ず成佛して天王如來と稱する時あるべしと說けり（法華經提婆品）。經の功德の譬に引く。 **五逆の達多は** 天王記別は天王如來の記別の意。記別は成

佛すべきを記し、所在名稱命數等を分別すること。**八歳の龍女は**云 龍女成佛の故事。娑竭羅龍王の女八歳にして義く衆生の諸根の行業を知り、陀羅尼を得、諸佛の所説甚深の神藏悉く能く受持し、深く禪定に入り、佛前に出でゝ一寶珠を獻じ、衆會の目前に於て忽然として男子に變成し、菩薩の行を具し、南方無垢世界の寶蓮華の上に坐して正等覺を得たり（法華經提婆品）同じく經の功德の譬に引く。惡人といへども成佛し、女人に障りありといへども猶正覺を得と、例を引き己の成佛を頼もしく思ふ心なり。**深達罪福相**云 法華經提婆品に出でたる偈文。八歳の龍女が佛前に現れ禮敬して佛德を讃頌したる詞なり。これを説讀すれば「深く罪福の相を達し、遍く十方を照したまふ。微妙にして淨き法身に、相を具へたまふこと世に、八十種の好を以て、も(用)つて法身を飾り（莊嚴）たまふ。天も人も戴き仰ぐ所、諸神もまたこゝごと感く恭ひ敬ひまつる」となり。三十二相は經想的大人物の形相を三十二方面より觀じたる天竺の人相説に基く詞にして佛にのみ限らず總ての大人の相なり。八十種好は又八十隨形好と稱へ、三十二相と更に細別していふる大人の形相なり。法身は佛の眞身。**德用**功力 **天龍八部**云 同じく提婆品より引く。「その時、娑竭羅龍王の女、聲聞も、天龍八部も、人と人に非ざるものもことごとく、皆遥かに彼の龍女の成佛して普く時會の人天の為に法を説くを見、心大に歡喜して悉く敬ひ禮せり」とある經文の一節。天龍八部とは天然以下の八部衆の意にて、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅加をいふ。八卷を八人に分ち八座に講讃供養する法會。朝夕に一卷づゝを修し四日に終る。**勤行** 佛に向ひ定時に回向する誦經、禮拜、燒香等の儀式。

八講

この孝養とて 志度寺の靈場たるは房前が母海人の為め孝養に出づとなり。孝と經とを通はせ、法華經の功德の故なりとの意をも兼ぬ。

五番目
畧脇能

海士

二月

シテ 海人ノ靈（後ハ龍女）
ツレ 房前大臣
ワキ 同從者

ワキ詞 次第上 出づるぞ名殘三日月の。出づるぞ名殘三日月の都の西よ急がん

ツレ詞 上 天地の開け初め恵久方の。天の兒屋根の御讓

ワキ詞 方 房前の大臣とは我が事なり。偖もみづからは門母ハ。讃州志度の浦。房前と申す所にて。空しくなり給ひぬと。聞

てゆくべ。急ぎ彼の所よりり。追善をも
なるべやと思ひい　習はぬ旅よ
奈良坂やみかきの山陰を春の　上歌
霞ぞ恨めきみ　三笠山。今ぞ榮
えん此岸の。今ぞ榮えん此岸の南の
海よ急がんと。行けば程なく津の國の。
とや日の本の始なる。淡路のわたり来

ぢ寄ねあらうぎそうていトモ

迄。鳴門の沖よ音をうハ泊定めぬ。
あまを舟泊定めぬあまを舟　海急
ぎは程よ。とはや讃州志度の浦よ
海著きもてぼ座ぬ。あれを見れば
男女の差別ハ知らぬ人一人来りぬ。
おの者や海待ちあつて。此處のいとれ
を委しく海尋ねあらうぎそうていとも

シテ一セイ上

海士の刈る藻よ掬むまもあらねども。
われらぬらすな。袖かな　打上　これは讃州
志度の浦。寺近けれども心あき。あま
の〳〵里の海人もとね。げよや名よ負ふ
伊勢をの海士はタ波の内外の山の月
を待ち。濱荻の風よ秋を知る。須磨
のあま〴〵は塩木よも。若木の櫻を折り

持ちて。春を忘れぬたよりもあるよ。此
浦もては慰みも。名のみあまの〳〵原よ
して。花のさく草もあり。何をみるめ刈
〳〵らりよ　下歌　刈らでも軍よ濱川の。刈ら
でも軍よ濱川の。潮海かけて流れ蘆の。
せを渡る業なれば。心苦しもひが
たきあまの〳〵里よ帰らんあまの〳〵里

かづきの海士トモ

我が住む里と申さるゝトモ

よ帰らん（早付）いろよこれなる女。おとゝの此浦の海士とてあるか（シテ）さんば此浦のかづきの海士とは（ワキ）かづきの海士ならば。あの水底の海松藻を刈りて来らせたへ（シテ）痛やこれは。飢よ臨ませ給ふや。我が住む里と申まそよ。かほど賤しき田舎の果よ。不思議や雲の

上人をみるめ召されたへ。刈るまでもなし此みるめを召されたへ（ワキ）いやくさやうの為とて。あの水底の月を賤しぎるよ。海松藻繁りて障とお（シテ）備はれば。刈り除けよとの御諚なり。昔も月のため刈り除けよとの御諚なり。昔もさるためあり。明珠をこの沖にて龍

宮へ取られしを。かづき上げしも此浦の
地次第上
天満つ月も満潮の。天満つ月も満
潮の。海松藻をいざや刈らうよ
早伯
暫らく。何と明珠をかづき上げしも此
浦の海士とて。あると申まする　シテ　さんば
此浦の海士とは。又あれなる里をぞ
おもまの〻里と申して。かのあまぐの位
み給ひ。在所とて。又これなる島ハ。
かの珠を取り上げ始めて見そめよ
よつて。新しきたま島と書とて。新珠
島と申ハ　早半　偖其珠の名をば。何と申し
けるぞ　シテ　玉中より。釋迦の像まします。
何方より拝み奉れども同じ面なるよ
よつて。面を向へよ背かぬと書とて面

向不背の珠と申ハ　かほどの寶を何とて漢朝よりも渡しけるぞ　シテ　今の大臣淡海公の御妹ハ唐土高宗皇帝の后に立せ給ひされバ其御氏寺なればとて興福寺へ三つの寶をわたさる華原磬泗濱石面向不背の珠二つの寶ハ京着し明珠ハこの沖にて

龍宮へ取られしを大臣御身をやつし此浦に下り給ひ賤しき海女と契をこめ一人の御子を設く今の房前の大臣これなり　子方　やあこれこそ房前の大臣よ　あらなつかしのあまや猶〻語り給へ　シテ　あら何ともなや今までハよその事とこそ思ひつるに偖ハ御身

のよそてゆひけるぞやあら便なやば
（子方上）みづからが大臣の所子と生れ恵開け
藤の門。さいぞもよかる事は。此身
殘りて母知らぬ　（トリコミ）　ある時傍臣語
りて曰く。泰くも所母は。讃州志度の浦。
房前のあまり申せば懼ありとて言
葉を殘さず。されば賤しき海士の子。賤の

女の腹より宿りけるぞや　（地上歌）　よそれ
とても幾帰末よ。よそとても幾帰末よ。
暫宿るも月の光雨露の恩よ。あら
ぞやと。思へば尋ね来りたり。あらあつ
かのあまぐ（シテ上）やと所涙を流し給へば
げよ心あきあまの衣　（地）　さらでも濡らす
我が袖を。重ねて去ぬとやおたづけ

あの所事や。すくる貴人の賤しき海士の胎内よ。宿り給ふも「せむらぼ。たとへば日月の。濃ようつりて光陰を増さどとくあり。われらも其あまの子孫と答へ申さんに。事も愚や我が君の。ゆかりよ似たり紫の。藤咲く門の口を閉ぢて。やもめ鳥のおとの名をば杉

だまま。ゝう 呈行 「とて。もの事よかの珠をおづきよげ所を。所前そそと奪ふで所目よかけゆべ。すらばそと奪ふで所目よかけゆべし」。其時あまぐ申まもやう。此珠を取りえたらば。此所なを世継の所位よあり給へと申しかば。子細あらじと領承給。偖い我が子

●獨吟仕舞
玉ノ段ト云フ

四恩よ捨てん命。露程も惜しからじと。千尋の縄を腰よつけ。も一此珠を取りえたらば。此縄を動かすべし。其時人々力を添へ。引き上げ給へと約束し。

カタル上

つつの利剣を抜き持つて

地上

彼の海底よ飛びのれば。空ハつよ雲の浪。煙の浪を凌ぎつゝ。海漫々と分けのりて。

直下て見れども底も無くぼとりも知らぬ海底よ。そも神変いさ知らぬ。取りえん事ハ不定なり。すくて龍宮よ到りて。宮中を見れば。その高さ。三十丈の玉塔よ。かの珠をとめ置き香花を供へ守護神。八龍並み居たり其外悪魚鰐の口。逃れ難しや我が命。

さまで恩愛の古里の方ぞ恋しき。あの浪のあなたよぞ。我が子はあるらん又大臣もおはせまらん。されども此まくよ。別れ果てぬん悲しさよと涙ぐみて立ちしが又思ひきりて手を合せ。南無や志度寺の観音薩埵の力を合せ給へとて。大悲の利剣を頼みて龍宮の中へ飛びのれば。左右へぞうとぞ退いたりける其隙よ。寶珠を盗み取りて。逃げんとまれば。守護神追つかくねて計ひ事あれば。持ちたる剣を取り直し。乳の下をかきさき珠を押しとめ剣を捨てぞ伏したりける龍宮の習よ死

人を忌めば。あたりよりて近づく悪龍あり、
約束の縄を動かせば。人ども悦びあり、
あげたりけり。珠ハ知らぬあまびハ海
上よ浮み出でたり。かくて浮みハ
出でたれども。悪龍の業と見えて。
五體もつぐ物ぞ赤よりあり。珠も
徒よあり。ぬしも空しくありけるよと。

大臣歎き給ふ。其時息の下より申も
やう。我が乳のあたりを開覧せとあり。
げにも剱のあたりたる痕あり。其中
より光明赫奕たる珠を取り出せ。偖
そ所身も約束のごとく。此浦の名
よよせて。房前の大臣と申せ。今ハ
何をか包むべき。とそ所身の母

あまびくの幽霊よ（刎退中より）地中に此筆の跡を
殘して。不審をなすで弔へや。今日
帰らんあだ浪の。夜とそ契れ夢ぢの。
あけてくやしき浦島ぢ。親子の契
朝潮の浪の底よ。ぶみけり立つ浪の
下よりよりけり　中入
日本行
いろよ申しあげ。あまりよ不思議なる

所事うそは程よ。成手跡を拔いて
成賢ぜられすぎるそは（子方カ）上「偖ハ
己母の手跡とぞ。ひらきて見れば魂
黄泉壤よ去って二十三年。骸を白沙
よ埋んで日月の（舎）算を經。冥路昏く
なり。われを弔ふ人なし。君孝行たらば
我ぢ冥闇を助けよ。げよそれよりハ

十三年、地中今さて八疑所有。いざ弔
きん此寺の志ある手向草。花の蓮の
妙經いろ〳〵の善を給へいろ〳〵
の善を給へ。出端上（謡掛）寂寞無人聲
後シテ上二あらありがたの所弔ひや。此經よ
り聞いて。五逆の罪多い天王記別を
蒙り。八歳の龍女は南方無垢世界

地拍子
●仕舞
たの。所經
より生を受くる。ほ〳〵轉讀志給へ
べし。地上滅罪福相。遍照於十方
微妙淨法身。具相三十二
十種好。地上次ハ用莊嚴法身
所載作。龍神威恭敬あらありがた
たの所經やな。早舞打上打返（中ノリ）今此經の德用
地
なて。今此經の德用なて。天龍八部。

人與非人。皆盛見彼。龍女成佛。備
こそ讃州志度寺と號し。毎年八講。
朝暮の勤行。怖し無量の靈地とな
るもの。この孝養。うけたまはる。

鞍馬天狗

解題　平治物語に基き、義経幼にして鞍馬山に在りし頃、僧正が谷の大天狗より兵法を学び得たる事を作かり。古来宮増の作と傳ふ。異本紀河原勧進猿楽記に寛正五年四月十日の勧進能に吉阿弥が演ぜしこと見え、親元日記に同じく吉阿弥が演ぜしこと見ゆ。

謡ひ方梗概　天狗物とはいへど善界車僧などは稍趣を異にし、これは武器の護神なれば、住大きくして心男まさりく、すべて細節に泥むことなく豪壮を旨とあらべし。

シテ　前は住を保ちて落着好く雇りと謡ふべし。此要領にて名告を謡ふ。「遠に人家を見て」云々は少しく間を取り、サシの調子なれども稍運びをゆるやかに扱ひ、取り澄したち体にしてなすが宜し。**半若との掛合**、思を包みて外は落着きたちやうに氷け慰ふ。「いかに申せ」直より漸次素を起して、ハキ〳〵とあらべく、「あら痛はしや」云々は和歌めきたち節扱にて、「所も鞍馬の木落の月」と踏みに雇りと謡ひて地へ渡す。「今は何をかつゝむべき」云々は十分に住を取りて雇りと大きかちべし。**後**は前よりもどつしりと大きく、上調又強く運しきを要す。「そもく〳〵これは」の出、一声の調子にて大々と謡ひ、**地**との**掛合**亦同じく、半若との問答に入りては十分に住を取つて静に雇りと扱ひ、「あらいとほしの人や」以下、普通の謡とも異り、諄々として諭すもの、如くに弛みなく扱ふ。「其如くに和上鶏も」はやゝゆらりとあちべし。**子方**　前後通じてさらりと、稍調子高なちが宜く、心持を附け又は巧みて謡はんなど思ふべからず。力めて平直なるべし。「さるにても」よりは**ロンギ**の調子なり。**後の出**「偖も沙那王が」はサシの調子にて雇りと勢好く謡ふ。想じて後は前より**ワキ**　住普通なり。「何々西谷の花」の**出能**にては狂言の持ち来りたる文と受取りて見る所なれば、其心にて素に弛みなくすらりと謡ひ、「今日見すは」の一句を其前後と斬か更へ、「げに面白き」よりワキ自らの考へに移る心持にて、やゝ趣を変ふ。詞は想じて少しく雇りのなら必宜し。**地**　初の「花咲かば」云々は調子を更へて、晴れ〳〵と稍賑やかに謡ひ、「御物笑ひの種時くや」は、軽やかなる心にてすらりとあちべし。「見る人もなき」はさらりと出て、止メを斬か後め、上歌より終の曲折なく極めて普通にすらく〳〵と扱ひ、「居兵法の」は稍力ケて出、雇りと止め、「立つ雲を」と直に渡けて、素序の前なれは鋭々に鎮めて納む。**後**は「たとへば」の一節、一声の調子にて前の勢を失はぬやう稍意に謡ひ起し、「花やかなりける」より鎮めて雇りと扱ひ、**シテとの掛合**は大きくどつしりとあるべく、「谷に満ちく〳〵」よりは稍住進みて烈しく謡ふべし。「張良履を持げつゝ」は雇りと扱ひ、「其如くに」よりゆるやかに、「そもく〳〵」以下住荘重にして勢好く謡ふ。

辭解

鞍馬 鞍馬山、山城國愛宕郡。京都の北三里にある山。半腹に鞍馬寺あり。鞍馬寺は近歴中の草創。毘沙門天を祭る。天永年間近歴寺に屬せしめたより今に天台宗なり。河海抄に「鞍馬寺は昔は四十九院ありけり。佛法の盛地なり」。**僧正が谷** 鞍馬寺の西北十町。慈恵堂の坊舎。東谷にあるものと、西谷にあるものとなり。**けふ見ずは** 云々 謡曲拾葉抄に定家卿の歌とあれど、出所詳なからず。群書類從本の家集に無し。**花咲かば** 云々 新改集に「花咲かば告げよといひし山守の来る音すなり鳥に鞍置け」とあるを少し変へて引けるなり。非例抄なるし、唐鞍の装飾に雲珠（うず）といふものあるにより、鞍に云ひかけ、鞍馬山とよみたる歌、上記三首の中に二首あり。**うず櫻** うす紅色の櫻なりといへど明ならず。夫木抄巻四にうず櫻の歌三首いでたり。**手折、栞** 櫻を折るといひ、音を重ねて栞（しをり）に續く、いとの枝を折りて路のしるべとなすを栞といふ。**童形** 少年。**遥に人家を見て** 云々 和漢朗詠集に出でたる白樂天の句に、「遥見人家有花便入。不論貴賤與親疎」。**大悪多聞天** 大悪なる多聞天の意。大悪とは、苦の衆生を救ふ大なる悪。多聞天は毘沙門天王にして、鞍馬天の本尊なり。**慈悲に漏れたる** 云々 本尊既に大悪の多聞天なるに係らず慈悲を持つことに洩れたる人々となり。**花の下の半日の客** 云々 平家物語少將都入の章に「花の下の半日の客、月の前の一夜の友、旅人が一村雨の過ぎ行くに一樹の陰に立ちよりて、別るゝ名殘も惜きぞかし」。**松虫の音にだに** 云々 引歌なるべしと思はるゝも未だ見當らず。松虫に人を待つ心を寄せ、其音を愛でて「音にだに立てぬ身」と續けたり。音に立てぬとは忍び音に泣くこと。身の音を受けて深山櫻といひ、人に知られぬ身を深山の櫻に喩ふ。**誰をかも** 云々 「誰か白雲」といへるに韻を重ねて、古今集の篠原興風の歌「誰をかも知る人にせん高砂の松も昔の友ならなくに」を引き、友鳥の序辭とす。**御物笑の種蒔く** 近世の俚謡に「權兵衛が種蒔けば烏がほじくる」といふ詞あり。これに類似したる古謡ありしには非らか。**言の葉茂き** 詞の多きこと。種蒔くとあるを受けて葉茂きといふ。**戀ぐさ** 戀の情を草の茂るに喩へし語。其草のまひ出づる意を寄せて老いに續く。**をな陽てそ** 云々 老人なればとて陽てたまふなの意。陽てといへるを垣に掛け、梅の縁にて花の情といふ。花の情とは、美しくほころび初めたる人情の意。半若が客僧に情深きをいふ。此一節男同士の恋の意を含ませたりと見ゆ。**花に三春の約** 花の季節を連へざるを固き約束に喩へし語。三春とは春三箇月。「花に三春の約あり。人に一何々」とありし古句に據れるにや未だ出處を知らず。**うちつけに** すぐにといふ程の意。後いかなるとも知られぬ馴れ初むもとすぐに心空に 心空になるといふと稲にかゝる意。**橘柴の** 云々 萬葉集の人麿の歌に「御狩する交野の小野の橘柴の馴れはまさらで恋こそまされ」。橘柴とは橘の木なり。馴の序に用ふ。歌の意は親みは増さずして恋しき心のみ増さるとなり。**心空に** 心空になるといふと稲にかゝる意。夢中になりて浮かるゝ。**安藝の守清盛** 平清盛。久安二年に安藝守なり。**時の花** 時勢にあひて花の如くもてはやさるゝ意。**盤腹には三男** 常盤は左馬頭義朝の妾なり。その腹に生れたる三男。異母兄弟多かりしかば斯く云ふ。**和上鵜** 御身上鵜と云ふ意。上鵜は佐島き人。**常** 義經記其他に出づ。**木蔭の月** 鞍馬の奇に暗しといふ意を持たせて木蔭れの月と云ひ、見る人も無きと續けたり。**沙那王** 源義經幼名を牛若丸と云ひしが鞍馬に入りて後沙那王と改めたること異本よその散りなん後ぞ咲かまし」。**松嵐花の跡訪ひて** 詩句又は歌句に據る所あるべしと思はるゝも見當らず。**見る人もなき** 云々 古今集に「見る人もなきや山里の櫻花が、雲中に聞えては、行人の腸を断たしむとなり。腸を断つとは悪の極をいふ。和漢朗詠集に「五夜之哀猿叫月」といふ句の次に「猿過巫陽始断腸」といふ句を載せたり。此二句よりとるか。**哀猿雲に叫んでは** 云々 哀しき猿の声花はあかるきものなれば夜に入りても、夕げしきの殘れるをいふ。**鐘は聞えて** 云々 入相の鐘は聞えたるながら夜の来ることの遲しとなり。**夕を殘す** 奥は既に暗しといひなく。**花ぞ知るべ** 花の明るさを通しるべに。**さても此程** 云々 牛若丸天狗の誘ふまゝに伴はれて、遂く鞍馬を離れたる所々の花を見たるなり。**奥は鞍馬の** 梅ヶ畑村の西、嵯峨村の西北にある大藪。以下皆花の名所。**高尾** 山城國葛野郡梅ヶ畑村にあり。**愛宕** 愛宕山。山城國高野郡大和國吉野郡にあり。**比良** 近江國滋賀郡にあり。**吉野** 大和國殘城郡にあり。**初瀬** 大和國殘城郡にあり。**横川** 近江國比叡山中の北の谷地。**天狗** 深山に栖のりと云ふ想像上の怪物。時代によりて想像せられたる形異なれども、平安朝以後は古き鳶の形をなすし、飛行変通自在にして、時に法師山伏などの姿となり、佛法を妨げ人を害するものといひ慣はしたり。平治物語牛若奥州下の條に「書は目ねもすがら武藝を稽古せられたり。僧正が谷にて天狗と夜なゝ兵法を習ふと云ふ」。**いでたち** 扮装。**薄花櫻** 表白く裏紅なる櫻の色目の称なれど、こゝには單（ひとへ）と着るを薄直垂といふ。さていへばそれなり。**紗** 花の枝あら紗。**直垂** 古く庶人の着たる一種の装束。その鎧下に水干などの袖の本に垂れたる指り紐。**露** 將永直垂水干などの袖の

腹巻 白糸にて織せる腹巻。腹巻は鎧の一種。 **天魔鬼神** 天魔は天界の魔王。鬼神は鬼畜。それらにてもかくはけなげにあらしといふを嵐に掛け、嵐山の花を半右の枝ひの花やかなる喩とす。 **筑紫** 九州。 **彦山** 豊前國田川郡の南嶺。ここに相模坊といふ天狗ありと傳ふ。 **白峰** 讃岐國綾歌郡松山の高峰。ここに伯耆國西伯郡にある山陰道の最高峰。ここにも伯耆坊といふ天狗栖のりといへり。 **飯綱の三郎** 飯綱は信濃國水内郡戸隠山の東に並びたち山。ここに住む天狗を飯綱の三郎といふ。 **富士太郎** 駿河の富士山に居る天狗を富士太郎といふ。 **大峰の前鬼** 大峰は大和國吉野郡に横はる大山脈。前鬼は役行者(山伏の祖)の使ひなりといふ鬼なれど、天狗の山伏姿なるより仲間として扱へり。 **葛城** 南葛城郡にある大和國西界の峻嶺。ここにも天狗栖のりと傳ふ。以下の山々皆天狗のすみかなり。 **高間** 葛城山の上方の山。 **よそまでし** 云々 新古今集の歌。「よそにのみ見てや止みなん葛城や高間の山の峯の白雲」を引く。 **邊土** 近邊の土地。 **如意が嶽** 京都の東にあり。比叡の一支峯。 **我慢高尾の** 天狗は我慢心高しといふを高尾にかく。 **人の爲めには愛宕山** 人のために仇をなすを愛宕山にかく。 **霞とたなびき** 云々 変通自在なるをいふ。 **天狗だふし** 深山にて突然暴風の如きすさまじき響の起る事。 **誓古の際** 誓古の際。 **いとほし** かはゆらし。 **漢の高祖の臣下張良** 云々 張良は漢の高祖の臣にして萬何、韓信と共に三傑と称せられし人、下邳の圯橋にて一老翁に逢ひ、此曲に作れる如く兵法を授かり得たる故事あり。其老翁は穀城山下の黄石の化現なれば黄石公といふ。此事別に謡曲張良に作らる。 **武略** 戦の駆引。 **源平藤橘** 白旗より下りて人臣となりし四名家。源氏、平氏、藤原氏、橘氏。 **水上** 源流。ここにては祖先の意。 **清和天皇の後胤** 清和天皇の皇子貞純親王の子経基。初めて源の姓を賜はりたり。その子孫一族を清和源氏といふ。牛若もその後胤なり。 **煙波滄波の浮雲** 波の如き浮雲、煙波といひ滄波といふも西海の像にて波の成語を出したるまでにて深き意無し。 **會稽を雪がん** 越王勾踐が呉王夫差に滅されて、會稽山に籠り、十年にして其恥を雪きし故事。

五番目ヨリ末

鞍馬天狗

三月

子方 牛若丸
シテ 大天狗(前ハ山伏)
ワキ 鞍馬東谷僧 狂言 能力

シテ詞

やうよい者ハ。鞍馬の奥僧正ヶ谷よ
ほまひまする。客僧にそ。備も當山よお
いそ。花見の由承り及びは間。立ち越え
よそ。なぐら捕もも眺めでやと存ハ」

ワキ詞

何と。西谷の花。今を盛とみえ
てゆよ。おのと音信も與らぬる。一筆

狂言

●小謡

陪ど上せめの古歌より曰く。げに見ぞ
くやしからまし花盛。咲きも残らぬ
散りも始めぞ。げよ面白き歌の心。たと
ひ音信なくとても。末蔭まとそ待つ
べきよ

地上歌

・花咲かば。告げんといひし
山里の。告げんと打切なれど、使ひ来
たり馬より鞍。鞍馬の山のうぐひす。手折
葉を去るべとて。奥も深き谷に咲きつづく。
末蔭より慕み居てしぼく花を眺めん。

仕言

いかなる申ひ。おれは客僧の渡りは。これは
近頃狼藉なる者にて。追つ立てよう
ぞうとて

口ノリ

・軽らく。さてさて此所座
敷と申まそ。源平兩家の童形達名
所座はよ。やうの外人は然るべからぬぞ。

似ていト問

然にても又なほうよ申せば人を選み
申さよ似ていト問。花をば明日こそ成賢見
ゆべけれ。まづ〳〵此處をば所立ち
おらうずるそいは狂言いやく〳〵それい
成賢こそゆへども。あの客僧を追ひ立
てうずるそいは。ワキいや唯所立ちあらう
ずるそいは。シテ上「急よ人家を見て花あれ
で即ち入る。論ぜず貴賤と親疎とを中
辨へぬとこそ。春の習と聞くものを。浮
世よ哀しき鞍馬寺。本尊は大悲多聞天。子方九上
慈悲よ洩れたる人ぞなほ げにや
花の下の半日の客。月の前の一夜の友。
何そ人へ好みあるものを。あら痛や
しやな寄つて花成賢見ゆへ シテ思ひ

よらぬや松虫の音ばかりたえぬ深山
櫻を訪ひのありがたさよ此山よ
子方上
ありとも誰か白雲の立ちこめらねば
知る人なし　シテ
誰をかも知る人よせん
子方上
高砂の　松も昔の　友島の　地上
笑ひの種蒔くや言の葉茂き窓草の
上ヅケ
老をば隔てそ垣穂の梅借そ花の

●小謠

地拍子
うちつけよ

青山に花よ春の約あり人よ一夜を
惜まん花よ三春の約あり人よ一夜を
駒とめて後いざ帰らんうちつけよ心
空よ捕柴の駒いまさらで窓のまき
らん悔しさよ　シテ
いざ申さん唯今の
兒達は皆こゝ帰りぬ何とて此一人
これは此屋の主なり　子方
さんば唯今の兒
達は平家の一門中なる安藝の守清

盛りの子どもたるにより。一寺の賞翫
他山の覚えの花たり。みづからも
同山にては候へども。よろづ面目もなき事
どもにて。月にも花にも捨てられて候

シテ

あら痛はしや候。さすがに和上臈は。
常盤腹には三男。毘沙門の沙の字を
かたどり。御名をも沙那王殿とつけ申す。

地拍子
見る人もなき山里ノきニ
大鼓ノ間ノ初拍ヲ付ク
ベシ古来「木の芽漬」ト
隠語アル此心得ナリ

●小謡

上歌

あら痛はしや御身を知れば所も鞍
馬の木陰の月。見る人もなき山里
の櫻花。よその散りなん後にこそ咲かば
咲くべきにあら痛はしの御事や
松嵐花の跡訪ひて。松嵐花の跡訪
ひて。雪と降り雨となる。哀猿雲に叫
んでは腸を断つとかや。心すごの氣

色やゆかべを殘して花のあたり。鐘の聞えて夜ぞ遲き。奥の鞍馬の山道の。花ぞ知るべなる此方へのらせ給へや。偖も此程お伴して見せ申しつる名所の。或る時は。愛宕高雄の初櫻。比叡の横川の遲櫻。吉野初瀬の名所を見殘せ方もあらばとて。（子方上下切ヤ）さるまでも。

いうなる人よまませば。われを慰め給ふらん。所の名を名のりおきませ。（シテ上下）今は何をか包むべき。われ此山に年經たる。大天狗にわれ候。（地上）君兵法の。大事を傳へて平家を滅し給へ。なり。さも思しめされば。明日糸會申せべ。さらばといひて客僧は。大僧正グ

谷を合けて雲を踏んで飛んで行く、
立つ雲を踏んで飛んでゆく 来序中入
後子方上
一声 備も沙邦まうでたちよ。肌よい薄
花櫻のひとへ。顕紋紗の直垂の。露を
結んで肩よりけ。白糸の腹巻白柄の
地上 又 長刀 たとへば天魔鬼神ありとも。
又 さこそ嵐の山櫻。花やうありけるいで

ヲ打ヲ打ヲ後シテ上 後シテ上 たちもの 大癒打上 抑とは。鞍馬の奥僧正ヶ
谷。年經て住める。大天狗なり 打上諷頭打切 地 まづ
御供の天狗。たれ〳〵ぞ紫ょ
シテ 立ち山の。聖前坊 地 四州よ 白峯の。
相模坊。大山の伯耆坊 地上 飯綱の三郎
富士太郎。大嶺の前鬼ヶ 黨葛城
高間。よそまでもあるまじ。遠土よお

地拍子
おいてハ比良

ソテハ　比良　横川　如意ヶ嶽
我慢高雄の峯よ信んで人の為よハ
愛宕山。霞とたゞびき雲とまつて
月ハ鞍馬の僧ぢゞ　谷よ満ち満ち
峯を動ず。（大鼓頭）風木枯瀧の音。天狗倒
しハおびたゝしや　いろよ沙那王殿。
唯今小天狗を糾らせていろよ。杭育吉の

きゞをゞおんぼうに御見せのぞ　さんば
唯今小天狗ども来りは程よ。薄手をも
斬りつけ。杭育吉のきゞを見せ申したく
いひつけども。師匠よや叱らし申さんと
思ひ留りてハ
あらいとほしの人や。
さやうよ師匠をゞ事よ思ひめをよ
つゝて。さる物語のハ、語つて聞かせ申

いべし。語備も漢の高祖の臣下張良と
いふ者。黄石公なる箇の一大事を相傳せ。
或時馬上にて行き逢ひたりしに何
ぞ。たりけん。左の履を落しいるを
張良あの履取てはかせよといふ。
安らぎでハ思ひしかども履を取て
はかせ。又其後以前の如く馬上にて

行きあひたりしに今度は。左右の履を
落し。やあいらう張良あの履取て
はかせよといふ。猶安からぬ思ひしか
ども。よくくこの一大事を相傳する
よしと思ひ落ちたる履をおつとって
地上
張良履を捧げつ。張良履を捧げ
つ。馬の上なる石公。はかせけるぞ

心解け兵法の奥儀を傳へけるそ其如くよ和上臈も其如くよ和上臈も。さも花やかなる所有様にて姿も心も芸に天狗と。師匠や坊主とぞ賞翫いとも大事を殘さず傳へて平家を討たんと思しめしも優しの志やな

●獨吟仕舞 太鼓頭

上歌 そもそも武器の嗜の道 舞働 打上打返 そもそも武器の嗜の道。源平藤橘四家とも

そう合きかの家の水上。青和天皇の後裔そうして。おらく時節を考へ来るよ驕れる平家を西海よ追下し。煙波滄波の浮雲よ飛行の自在を受けて。竜蟠を平らげ。會稽を雪ぐん。所身を守るべし。これまでなりや。お暇

申して云ふ帰れば。牛若殿よ。まづ給へ。げに名残あり。西海四海の合戦と。いつも影身を離れぬ弓矢の力を。添へ守るべし。頼めや頼めと。陰暗き。頼めや頼めと。陰鞍馬の。梢より翔りて。失せにけり。

定家

解題 旅僧、時雨の夕、時雨の亭に休らひ居て、昔定家卿と契りし式子内親王の亡霊に逢ふことを作れり。古くは定家蔦といへり。禅風習道目録にもしか見ゆ。永正二年四月東四口勧進猿楽の第四日目に演ぜらる。二百十番謡目録に世阿弥の作、能本作者註文に禅竹作とあれど、古き記録に據る霊無し。此情事の典據不明なれども、その無稽なるべきは辞解中に解く所の如し。

謡ひ方梗概 秋雨蕭々として墓塔にそゝぐ所、馬の葉徒に残紅を留む。其情趣の優婉にして静寂なる、藝物の中にても多く類を見ざる処、大原御幸、楊貴妃と共に三婦人と称して、其風姿、品位尋常一様ならず。九番習の中にても重き曲に属し、節に泥まず、位に因はらく事なくして能く曲の精神を表はさんは、多大の修養に待たざるべからず。

シテ 前は常の里女によそほへども位素高く、優に美しく扱ひ、妄執になやめる心なるべし。出の**呼掛**は少しく離れたる所の人へ言ひかくるなれば、上調子になるを度として品好く扱ひ、以下**ワキとの問答**、おしなべて優に静なるべく、中に軌きて「時雨の亭とて」「此亭を建ておき」の二所特に大事に扱ひ、「古跡といひ」云ふを稍力入り素味に、「偽りのなき世なりせば神無月」の一句少しく間をおきて丁寧に出で、**掛合**は前の位を保ちて静に、頑次聊か寄せて謡ふ。「今日は志す日にて候程に」の詞より前とは素を更へ稍位をすめて確りとあるべし。「のう〳〵これなら」云ふは呼掛に非ざれば、あまり大きくは謡はず。「式子内親王」以下語のやうなる心得にて落着好く確りと扱ひ、「思ひ〳〵の御契」と少しコメて静に、「ともに邪姫の」より柔かに素をかけて謡ひ納む。**サシ**は侍従にさらりと、クセの**上端**は静に確りとあるが宜し。**ロンギ**は餘り重くならぬやう、ゆるやかに承け渡す。**後**は前よりも一段の位を取り、姿は清廉なるべきも謡は力めて浮華を避け、静にもの寂びて然もしだらくなきやうに扱ひ、「夢かとよ」は浮きを抑へてぼんやりと寂しきやうに出、「昔は花風雅月に」より一声の調子に更へて少しく声を起せど、やはりしのび勝ちなるを宜しとす。**地との掛合**、些も波乱になる事なく、「御覧ぜよ」よりは前よりもはつきりと扱ひ、「唯今後編」云ふを稍引立て、すらりと、以下**掛合**の中、「あらありがたや」は和吟の心にて出て半より明吟に扱ひ、「げにも〳〵」と素をこめて静に確りと謡ふ。「おもなの舞の」は静に大きく、此所に「謡出し口傳」とある通は能の時大小の習の間を待ちて謡ひ出すが為なれば常の素謡に関係なし。**ワカ**は浮きやかにならぬやう注意を要すれど、舞の前後は法味を喜ぶ心あれば、餘りに沈みて重くなるは却て悪し、此心得にて**地**と**の掛合**を謡ふ。**ワキ** 大口を穿く僧なれば位を取りて確りと、曲柄にうつるやう素かに静なるを宜しとす。次第は少しく寂びて謡ひ、**名告**は静に位を保ち、**道行**はやゝさらりめに、次の詞の

中「面白や」云くは衆を要へて晴れやかに出、「あら笑止や」と更に更へ、猶下に取りて、俄に氣着ける趣に謠ふべし。シテ出でいよりは位を讓れど、然も猶軽くはせず、向着の中「馬蔦追ひまとひ」は少し長く應げて大きく、「形も」と下目に取りてさらりと扱ふ。**待謠**は靜に珠樹たるべし。**地**　初の「今降るも」は更へて出、声を抑へてイロも產み字を隱し、慇じて寂しき風情を強い表はすべし。**クリ**は少しく位をすくめて、節を大きく節なき震を運びめに、サシよりもさらりと扱ふ。**クセ**は出より「悲しき」までを靜に溫やかに、以下聊か運びを附け、上端後は更にすくむ心なるべし。**ロンギ**は調子を別にして粘らぬやう謠ひ行き、「われこそ式子内親王」と茲より鎭めて此一句位を保ち「石に殘す形だに」と大事に確りと謠ふ。後は「様々なりし」云々の**掛合**、シテの豪を承けて少しも華やかに傾く事なく、「古事も」稍さらりめなれど、しつとりとしたる味はひを含み、「外はつれなき」より聊か鎭めて、夢幻の如く現れ出でたる様にあらべし。「一味の御法の」は稍か、つてすらりと出、「ほろ〳〵と解けひらごれば」の一句を大事に扱ひ、「此報恩に」より音を締めて靜に出づれど、心は前よりも稍晴れやかに持つたり。「有様やな」は前を承けて緩やかに附け、**シテとの掛合**は賑やかにならぬ程にて寛りと乘り、その後にて謠ひつづけ、止めをほんやりと納む。

注意すべき謠ひ方

三枚表の「此亭を建ておき」の**亭**のイロへはふく、しかも明瞭に強ふ。西行櫻にあるものと同じなり。四枚表の「偽のなき世なりけり」は浮舟の「いかでかさまにて謠ひ、其產み字より**き**に續けて下音中音の中間の音に抑へ、世を充分に浮かせて「世なり」と當り下げに扱ふ。又、枚表の**サシ**、「今は玉の緒よ」云々との終は三字落しなれども、常よりは聊か抑へ心に扱ふ。強ひて云へば上音と上のウキとの中間の高さに謠ふとも云ふべきか。

辭解

北時雨　北の空より降り來る時雨。北國の僧の行く方定めなきに寄せて云へり。**冬立つや**　冬の立つと旅に出で立つとを兼ぬ。又幾つの縁にて旅衣に續く。**朝まだき**　夜の明けぬうち。**紅葉に殘るながめ**　冬まで散り殘れる紅葉が花の如しとて花の都を呼び起す。花の都は帝都をさす。**千本**　今の北野の社の東北の地、元の千本松原を云ひ、又古の朱雀大路をもいふ。**神無月**　陰曆十月。**笑止や**　困却したる時の歎声。**由ありげなる**　由來あるらしき。**時雨の亭**　藤原定家卿の遺蹟たり。其旧蹟と云ふもの、千本、嵯峨、相國寺内普光院、衣笠山の麓、小倉山定家山莊跡等にあれども明ならず（山州名跡志）。**藤原定家**　俊成の子。左近衛少將、治部卿、民部卿等をへて權中納言たり。後鳥羽上皇の敕を奉じて新古今和歌集の撰に與り、又後堀川帝の敕命により新敕撰和歌集を撰ぜし歌人。後雜髮して名を明靜と改め、八十歳にて歿ず。**逆縁の法**　式子内親王の蹟を弔はんとて來りしに非ずが故に逆縁といへり。此用ひ方本來の佛義に合はざれども謠曲にては斯く使ひ慣はしたり。**菩提**　佛果　時雨を留むる　時雨の名を永く留むる意。**定めなき時雨**　後撰集に「神無月降りみ降らずみ定めなき時雨ぞ冬の初めなりける」。**時雨の頃の年々**　定家の歌に「小倉山時雨る頃の朝な朝な」云々とあるを少し變へて用ふ。**偽の無き世なりけり**　云々　拾遺愚草に「時雨知時私家」と詞書して出でたる定家の歌なり。此歌後撰拾遺集にも出でゝ詞書に「時雨知時」といへるを、定家の心を」とあり。人の涙には偽多きが常なるに、誰の眞心の疑りて時雨となりしか知らざれども、其時を違へぬを見れば、世は必ずしも偽のみに非ずの意。**なき世**　偽の無き世と、定家の亡き世とを兼ぬ。**人はあだなる**　人間の空しく移ろひ無き。**他生の縁**　一樹の陰に宿り、一河の流を汲むも皆他生の縁なりといふ白拍子の歌（平家物語）あるを引けるにや。此語は說法明眼論に「武蔵二村、宿一樹下、汲一河流、一夜同宿（中略）、親疎有別、皆是先世結緣」とあり。他生の縁とは前世よりの因緣。**今降るも宿は昔の時雨**　今降る時雨もやはり昔の宿の時雨の意。降るに古りを掛く。幾千載集に「ふりにける宿は昔の名殘にて」云々とあり歌の語調を借りたるにや。**心すみに**　心の澄むに住むを掛く。**定めなや定家**　定めなき亭の時雨といふを定家の名によりて續なせり。**庭も離も**　云々　庭はこれ、離はそれと區別のつかぬ迄にの意。古今集に「里は荒れて人は古りにし宿なれや庭も離も秋の野らなる」。**霜**　杜牧集に「經幾年、田變換、星霜」。**式子内親王**　後白河帝の第三皇女、平治元年賀茂の齋院となりて任に在ること十一年、後雜髮して法名を如法と云ひ、大炊御門齋院又高倉宮と称せり。御年は不明なれども第二皇女第四皇女の年齡より考ふるに齋院又高倉宮と称せり。建永元年歿去、歿去の時は五十五、歳なるべし。されば定家よりは一年餘の年長にて、齋院より下り給ひしは八九才の時なるべく、歿去の時なれば此曲に作られたる恋のあるべくも非ず。但此事は雜文集に見え、内親王齋院より下り給ひ一後、定家及はずながら心を寄せ、「數くとも恋ふとも」云々の歌を詠みかけたりとある由なり（拾葉抄）。謠曲以後のものなるべし。又謠曲以後の書なる應仁記に千本の敏喜寺に定家葛の墓あり由記せるは、此謠より出でたる記事なり。**定家葛**　蔓草の一種。但、此謠に出でたる名なり。**賀茂の齋院**　天皇の御

即位妄に未婚の皇女若くは女王を選びて伊勢神宮と賀茂神社とに奉侍せしめ給ふ制あり。これを伊勢にては齋宮、賀茂にては齋院といふ。**邪婬** 不義の淫事。佛の五戒の一。**妄執** 迷妄して執着すること。**心の奥の信夫山** 云々 伊勢物語の歌「忍ぶ山忍びて通ふ道しがな人の心の奥も見る」べく」の句を借る。心の奥にて忍ぶと云ふを奥(陸奥の国)の信夫山(岩代国信夫郡)に掛く。以下、浦茎、芝の露、露の世、世がたりと云ひ掛けたり。**玉の緒** 新古今集に出でたる式子内親王の歌。末句「弱りもぞする」。玉の緒とは命の事なり。一首の意は、かくて生きし長らふる間に、忍びて思ふ張き心の弱りゆかんことが惜ければ、今の間に命も絶え果てよとなり。**穂に出でそめし** 忍ぶることの弱りといへるを受けて、忍ぶ能はずかくれし恋の色に現れて穂を結びたりといふを、花薄に寄せて云ひ飾れり。穂に出づとは姿形に顕るる意。**かれぐの中** 行き来の絶になりたる間柄。薄の縁にていへり。**昔は物を** 云々 藤原敦忠の歌「逢ひ見ての後の心にくらべれば昔は物を思はざりけり」。**あはれ知れ** 云々 伊勢物語の歌に「恋せじと汚き洗川にせしは被神は受けずもなりにけり」。定家の歌。下の句は「世々にふりぬる山蓋の袖」。山蓋の袖とは舞人の装束の山蓋にて掲りたるをいふ。老を嘆けり歌なり。**憂き恋せじと** 云々 「世々にふりぬる山蓋にて掲りたるをいふ。老を嘆けり歌なり。**憂き恋せじと** 云々 「世々にふりぬる山蓋にて掲りたるをいふ。老を嘆けり歌なり。**よその聞え** 外聞。其多き恋の中。**あだなる中** 歌もしからぬ恋を大方に掛く。**空恐ろしき** そぐろに恐ろしきこと。空といへるを受けて日と云ひ雲といふ。**雲の通路** 云々 古今集良岑宗貞(遍照)の歌。「天つ風雲のかよひぢ吹きとぢよ」。**数くとし** 云々 拾遺愚草に出でたる定家の歌。末句「峰の白雲」。恋人は葛城山の峰の雲の如く如何ともし難しの意。葛城山は大和の峻嶮。**色こがれ纏はり** 紅葉したる葛の色の赤く焦れたると、纏はれたる葛と、**乱れ髪** 恋にやつれたる様とに云ひ掛く。**呉織** 冠する恋の執着に喻ふ。**荊の髪も結ぼれ** 新古今集の歌「浅茅生や袖に打ちにし枕調。暮れに掛く。**霜に朽ちにし** 新古今集の歌「忘れぬ夢をふく嵐かな」。**名** 恋の香き名。**よしや草葉の** よしやそなきと云へるに音を重ねて、伊勢物語に「よしや草葉よならんさが見ん」とある句を借り、草の名の忍ぶに掛く。**かげろふの** 岩に寄する枕調を石に用ひたり。

又かげろふは春時地より昇る水蒸気の名にてもあれば、石塔の苔に閉ぢられて見分け難きを「それとも見えず」と云はんための伏線たらしめなり。**念の珠** 珠数 **夢かと** 云々 古歌と思はれども出典未だ見出でず。或は後古今集に定家の歌「さぞ数くと恋を駿河のうつの山うつつの夢の又とも見えねば」などによりて作者の作れるにや。蔦の細道は駿河の宇都の山にあり。その山は書きさへ暗く淋しき慶なりといへば、闇の現と云ひ、又月にもたどると云へり。ここに冥途に迷へりと、蔦とを云はんとの後とす。**松風蘿月** 云々 本朝文粋の源順の賦に「松風蘿月偕老於煙巌之阿」。蘿月は蔦葛を照す月。こゝは雅情を以て文はりたる意。内親王、定家、共に歌人なればなり。**翠帳紅閨に** 云々 美しき閨の中に契りしを云へり。大江以言の遊女の序に「翠帳紅閨為事之禮閨に枕を並べし妹背」とある 法華経異「云々」。此所二句、江口の詞に「松風蘿月に調を交す廣客」、又「翠帳紅客閨居遊高唐、願為枕席、王因幸之、去而旦為朝雲、暮為行雨」云々の故事に申りて男女の契のはかなきを云へり。**朝の雨夕べの雨** 宋玉の高唐賦に「昔者先王(楚懐王)嘗遊高唐、怠而晝寝、夢見婦人、曰妾巫山之女也、為高唐之**常** 生滅特変して定めなきこと。**葎の宿** 葎(雑草の一種)なども生ひて荒れたる宿。**佛平等説、如二味雨一、随二衆生性一、所受不同、** 法華経薬草喩品の文を音讀せり。以上の様に後ける次句「如彼草木、所稟各異」とあり。経文の意は佛の慈悲を以て偏頗無く法を説き給ふ事恰も天の雨を降らす恰も彼の雨を稟くる草木の潤ふ所同じからざるが如しとなり。**あだ波** 徒にうつ波。人の身の沢もなく移り動くに喻ふ。その縁にて主居と続く。**薬草喩品** 法華経二十八品中の第五品。衆生を草木に喩へて説けり。**妙典** 法華経をさす。**洩らす草木の** 同薬草喩品に「十方佛土中、唯有一乗法、無二亦無三」。**佛道ならせ** 成佛せさせ。**妙なる法** 妙法華経の訳。**普き露の恵** 同薬草喩品に「密雲彌布、徧覆三千大千世界、一時普澍、其澤普洽、卉木叢林、及諸薬草、(中略)大根大莖、大枝大葉、一頃、四句の偈文「一佛成道、観見法界、草木國土、悉皆成佛」より出づ。**二つもなく三つもなき** 一乗法、無二亦無三」。**草木國土、悉皆成佛** 一頃、四句の偈文「一佛成道、観見法界、草木國土、悉皆成佛」より出づ。**足弱車** 進みの遅き車。**火**

宅 三界の安からざるを火に包まれし家宅に喩へし謂。法華經の三車火宅の喩を引き、足弱車ながら火宅を出でたりと云ひて成佛を喜ぶ意とす。**報恩** 恩返し。**雲居** 禁裏

昔を今に返す 昔の様を今に返すと云ひて昔ながらの袖を翻すに通はす。**小忌衣** 豊明節會などに舞姫の用ひし裝束。**おもたな** 面目無し。**面はゆ** まばゆく恥かし。**月の顔ばせ** 美しく晴れやかなる顔。その晴々しからぬを曇りがちと云へり。**桂の黛** 三日月の如くほのかに匂はしき書き眉。桂とはこゝにては月の意。月中に桂樹ありといふ支那の古説に據る。**葛城の神** その書き眉の落ちはふるを落ぶらしと云ひ、落ちと云ひしを受けて更に涙に續く。**姿** つたなやに音を重ねて蔦を云ひ、蔦の縁にて葛城を出す。昔、役の小角(山伏の祖)と云ひし行者、葛城山と吉野山との間に橋をかけんと思ひ立ち、葛城の神(一言主)に架橋を命ぜしに、神は顔の醜きを恥ぢ、夜のみ出でゝ働きたれば小角怒りて葛にて神を縛し、谷に押し籠めたり故事あり。内親王の月の顔桂の黛の見苦しくなりしと、夜の明くるを厭ふこと、を葛城の神に喩ふ。猶こゝに葛城の神を出すことは、例の雜文集に定家の歌「されば」こそ夜とは契れ葛城の神も我が身も同じ心に」を載せたるに由るやう拾葉抄に出でたれど、其歌定家の詠なるか否かも明ならず。**夜の契の云々** 拾遺集に「岩橋の夜の契も絶えぬべし明くるわびしき葛城の神」。**有りつる所** もとの意。**かへるは葛の葉** 裏返る意にて葛の葉に返らと云ひ別はしたればかく云ふ。

九番習
三番目

十月 シテ 式子内親王ノ靈(前ハ里女)
ワキ 旅僧

定家

早次第 山より出づる北時雨 山より出づる北時雨行くへや定まるらん 北國方より出でたる僧にて候。われ未だ都を見ぬ程よ。此度思ひ立ち都よりは 道行上 冬立つや。旅の衣の朝まだき。雲も行き

見ぬ程よ

如(ごと)く遠近(をちこち)の。山又山(やまやま)を越(こ)え過(すぎ)て。紅葉(もみぢ)の残(のこ)る梢(こずえ)がめまで。花(はな)の都(みやこ)より
着(きし)きよけり花(はな)の都(みやこ)よつきよけり
早行
急(いそ)ぎは程(ほど)よ。これいはや都(みやこ)千本(せんぼん)の
たりまでおりげりよ。暫(しばら)く此(ここ)あたり
よ休(やす)らまでやと思(おも)ひは。面白(おもしろ)や須(す)ハ神(かみ)
無月(なつき)十日(とをか)餘(あまり)。未(いまだ)の梢(こずえ)も全(まった)く枯(かれ)て。

枝(えだ)残(のこ)りの紅葉(もみぢ)の色(いろ)所(ところ)ごの有様(ありさま)
まで。都(みやこ)の氣色(けしき)ハ一入(ひとしを)の。眺(ながめ)殊(ことに)ある
べかめり。おら笑止(しょうし)や。俄(にわか)に時雨(しぐれ)降(ふ)り
来(きた)りて。これ由(ゆ)ありげなる宿(やど)りのは。
立(たち)寄(よ)り時雨(しぐれ)を晴(はら)さでやと思(おも)ひは
呼掛
シテ
のうく。所僧。何(なに)よ其宿(そのやど)へハ立(たち)
より給(たま)ひぬぞ
早
唯今(ただいま)の時雨(しぐれ)を晴(はら)

さん為よ立ち寄りてそそぬへそれい
時雨の亭とて（ていとて）よりある處あり。其心
ちも知らしめりてとち寄らせ給ふと。
思へで（おもへで）おやうこよ申まあり（おやうこよ申さもあり）げよく
とれある額を見れば。時雨の亭と書か
れたりをりから面白うそそぬへそれい
いうある人の建て置かれたる處とて

ゆそ（ゆそ）とれい（とれい）藤原の宣家の卿の
たておき給へる處あり。都のうちそい
申しあるら。心凄く時雨もの哀あれば
そそこの亭を建て置き。時雨の涙の
年ぐ。此處にて歌も詠ず給ひ
とあり。古跡といひをりからといひ。其
心ちも知らしめて。第縁の法もも

說き給ひて。かの唐菩提寺に弔ひあれと。勸め給らせ給ん其為よとこれまで現れ来りたり　備い藤原の宣家の卿の建て置き給へる處なや。備く時雨をとゞむる宿の歌いづれの言の葉やらん　いや何れもさだめなき。時雨の頃の年ぐれば。分きてそれと申し難　さりながら。時雨時を知るとぞ云ふ心を。偽のなきせなりけり　神無月。誰ら誠より時雨れそめけん。此ことなきよ　私の家にて書かれたれども。此歌をや申さべき　はつ上げよあられる言の葉なり。さても時雨い偽のなきせよ　殘る跡なごら　人いあだなる古事を。

●小謡

語れど今も假の世よ　他生の縁に
打ちもせぬ。これぞ一樹の蔭の宿り
「河の流を汲みてだよ　心を知れと
地上歌
「下ちりかからよ　「人今降るも。宿に昔の
時雨にて。宿に昔の時雨にて。心をみ
る其人の。哀を知るも夢のせの。げに
さだめなや宮家の。軒端のみ時雨。

ぶるい程よ

「詞」蒼きに帰る涙の。袖も離れもそれと
なく。荒れのみ増さる叢の。露の宿り
も。枯れ枯れに物凄きみべなりけり。物
凄きみべなりけり。「げに」げに志を日
ごろは程よ。墓所へ参りは所へ参りは
「早」「そ」それとて出家の望をとは。
やがて参らずぎるとては」「シテ」のらく

とれなる石塔虫隠ゆへ　ロキ　不思議
やなとれなる石塔を見れば。星霜古り
なる葛葛言ひまとひ、形も見えぎる。
とれもいなる人の主るまてゆそて
シテ　とれい武子内親王の古墓まてゆ。又此
葛をば、宮宮家葛と申ゆ　ロキ　あら面白や
宮宮家葛とゆ。いかやうなるいはれまて

ゆそ所物語りゆへ　シテ　武子内親王始ハ
賀茂の齋の院よそ家ちり給ひしが。
程なく下り居させ給ひしを。宮宮家の
御心忍び忍びの所契浅からぬ。其のち
武子内親王程なく空しくなり給ひ
しよ。宮宮家の執心葛とあつて古墓よ
言ひ纏ひ。互の苦み離れやらぬ。ども

よ。邪淫の妄執を。御經を讀み弔ひ給
へと。猶〳〵語り給らせはもん 地 忘れぬ
ものをまへの。心の奥の信濃山。忍びて
通ふ道芝の露の。せ語よりぞあき
シテサシ上
●サシクセ獨吟 ●いろいろの緒よ絶えねばかはらで 地 忍ぶる事の弱るなる。心の秋の
花薄。穂よ出でそめ 契をて又。結れ

結れの中とおりて シテ 昔ハ物を。思ひ
ざり 地 後の心ぞ。果しもあきあ
ぢきれ。知れ。霜より霜よ朽ち果て。
せをよふりゆく山藍の。袖の涙の身
の昔。憂き窓せ。とち被せ。賀茂の
齋のみやゆもの。そなたより給よ身を
れども。神や受けぞもあるよけん。人の

地拍子
契の色よ

契の色よ出でけるぞ悲しきつむて
もしどあだ世のあだなる中の名
流れてよそのの間えぬ大方の空恋ろ
き日の光雲の通路絶え果てぬ少女
の姿留めえぬ心ぞつらきもろともよ

シテ上
げよや歎くとも違ん道
やなぎ

地
君葛城の嶺の雲と詠じ

けん心まで思へばかなる執心の宮家
葛と身はなりて。この所踏よりつて
なく離れもやらで葛紅葉の色薫
がれ纏やり。荊の髪も結ぼれ。露
霜よ消えなんとする妄執を助け給へや。

ロンギ上
なりの事を聞くからよ。げぶも程
なく呉織怪しや所身誰やらん

シテ上　誰とても。なき身のはてハ浅茅生の。
霜より打ちつる名ばかりハ。残りても猶
よそなるき　地上　より　や草葉の忍ぶとも。
色ハ出でよ其名ばかりも　シテ　今ハ色まで
地　此上ハ。われとそ式子内親王。これまで
見えぞ来れども。まことの姿ハあげろうの
石ハ残れ形だに。それとも見えぬ葛

問ヲ待チテシテノ謡出ニ習アリ

後シテ中　夢かとよ闇のうつつの。宇津の山。
葛葉を助け給へと云かと見えて
失せにけり。いかて見えて失せにけり　中入
口上歌　待謡　夕べも過ぐる月影。夕べも過ぐる
月影。松風吹きて物凄き草の蔭
なる露の身を。思ひの玉の数ならぬ。弔ふ
縁ハありがたや弔ふ縁ハありがたや　間
夢かとよ闇のうつつの。宇津の山。

地柏子
クチナシ
幻
モ
トモ

月もたどる。葛の細道　昔ハ松風
蘿月ヨ調ヲ交ル。翠帳紅閨ヨ枕を
並べ　様ぞ変りし　情の末　花も紅
葉も散り散りよ　朝の雲　夕べの
雨と　合フ　吉事も今の身も。夢も現も。
幻も。もよ無常の世とありて跡も
残らぬ。何なるしの草の蔭。さらば

葛の宿なれ。ドかつれなき宮家葛。
こし見給へや所僧　あら痛やしの
所有様やあら痛やしや。佛平等
説如一味雨。隨衆生性所受不同
シテ
虫賤へせよ身かあだ浪の起居だよ。
なき跡までも苦しみの。宮家葛ヨ身を
閉ぢられて。かるる苦み隙なき所よ。

ありがたや。唯今讀誦し給へば、
藥草喩品よのうあらくあれや
此妙典よ。淨なる草木のあらぎれぞ。
執心の葛をかけ離れて。佛道おらせ
給へ、あらありがたやげにもく。
とりぞ妙なる法の教 普き露の
惠を受けて こつもなく 三つも

なき 地上 一味の法の雨の志たぐり皆
潤ひて。草木國土。悉皆成佛の樣を
得ぬれば。宮家草葛もかくる涙も。ほろ
ほろと解けひろごれば。よろくと足
弱車の火宅を。出でたるありがたさよ。
この報恩よいざさらば。ありし雲居の
花の袖。昔を今よ返さまる。其舞

間ヲ待テテシテノ謡出ニ習アリ

●小謡

●仕舞

地 姫の小忌衣（間）シテ上 おもかの舞の

地 有様や哀 序ノ舞 おもかの舞の。有様

地 やあきおもかや。おもはゆのありさま

地上 やあ。シテ 本よりこの身ハ 月の顔

地上 ぎせも（キリ）曇りがちなる 桂の黛も（キリ）

シテ 落ちぶるる涙の 地上 露と消えても

つたかや葛の葉の。葛城の神姿。恥

かしやよ哀や。夜の契の。夢のうち

まで有りつる所よ帰るハ葛の葉の。

本の如く。（中ノリ）言ひ纏ひ纏ひ宮宮葛。

言ひ纏ひ纏ひ宮宮葛のはかなく

も形ハ埋もれて。失せにけり。

咸陽宮

解題 古き別名を荊軻といふ。荊軻、秦舞陽、燕丹太子の爲に始皇帝を刺さんと謀り、秦の叛將樊於期の首級と燕の地圖とを持ちて始皇に見え、既に意を果さんとしたるも、花陽夫人の琴の秘曲に醉ひて油斷せしため、終に事破れしことを作れり。異本平家物語に據れりと見ゆ。平家物語本と比べ見るに辭句稍其何れかに一致せり。能作者註文に作者不明。

能之變式 二三題（ジサンベン）之傳の時は琴の段の中「七人の屏風も」より「聖人の御たすけ」まで と繰り返して謠ふ。

謠ひ方梗概 王者の威嚴と刺客の霸氣とを經緯として之に配するに美人の琴曲を以てしたる曲なれば、よく動靜剛柔の變化に心を留め、全篇を通じて勢好く弛緩無きを期すべきなり。

始皇 鶴亀に似てそれよりも嚴に住大なるべし。抑この「咸陽宮」云々の出より以下、**地との掛合**上哥りのせぬやう注意し、稍さらりめに取りて堂々と謠ひ、一点の搖きあるべからず。「何と燕の國の「傍に」の詞は落着ありて柳へ調子に唱りと云ひ、「不思議な箱の底に」云々の一節は氣を統めて十分に張く、「いかに荊軻」以下の一節は物々しく唱りと出て、句意によりそれ〳〵心持を變ふ。但、靜なる所も怪みたる氣色はあるべからず。「いかに花陽夫人」云々は唱りと位を持ち、「荊軻が袖」へたるは氣をかけて急に扱ひ、「帝赤劍を拔いて」は稍ゆるめて力を籠む。

荊軻 始皇を刺さんとする程の者なれば活潑として滋味あるべからず。まづ出の一聲は勢好くさらりと運び、其運を受けて**秦舞陽との掛合**を謠ひ、**上歌**も唱りと扱ひてさまでは靜めず。「荊軻は佩劍を解いて」云々の**掛合**は前のと同じく呼吸に少し位を添ふ。「あ、不覺なりとよ」云々は秦舞陽を叱咤する氣込、以下それ〳〵心持あるべし。

秦舞陽 荊軻と同じく氣組み なれど怒りて少し位を強く取るべし。

大臣 さらりと謠ふ。

地 初のシテとの掛合はシテの位に應じて稍さらりと謠ふ。**上歌**は鷹揚に唱りと出、さらりと張々しく扱ふ。「げに理とても」も運び好く、「荊軻は期したる」云々は飛鳥の如く帝に肉迫する所なれば其意氣を專とし鋭くかゝつて能く謠ひ終つ。

琴の段は充分に品位美く、華やかに上に取つて、しかも節々に心して氣を統めて謠ふ。曲中芳一の謠ひ所なり。序破急の謠ひ分け、氣合など親しく師の教に基つべきも、初の段は詞にむつくりと扱ひ、「君聞けや」より唱りと弛みに謠ひ、「有無に附へ」「唯後々」などに心持し、「眠れるが如くなり」にて少し張む。「時移る」以下別段に更へて幸運と高の位になる。「聊尺の神」以下更に一層運を進め、氣を掛けて極めて急に物々しく謠ひ、「帝赤」の返し以下前段には無け程なれども稍運を持してさらり〳〵と謠ひ納む。

解解

咸陽宮 秦始皇帝の都、咸陽は渭水の北、今の陝西省西安府。**都のまはり** 以下平家物語によりたり。本によりて、一万八千三百八十里。或は七十餘里とも。**三里高く** 平家物語に「肉衰てば地より三里高くつきあげ」云々。肉衰は皇帝。**鐵の築土** 鐵城。城方本平家物語に「鐵のついぢ高さ百餘丈、方四十里に築かせ」云々。**雁門なくては** 平家物語に「秋は田面の雁、春は越路へかへるにも、雁門と名づけて、鐵の門をあけてぞ通され」云々。**眞珠の砂** 榮華の極を形容す。平家物語に「長生殿あり、不老門あり、金屋殿とある」に據れり。**銅の柱三十六丈** 平家物語に「東西は九所、南北五所に作られたり」云々。**五丈の幟竿** 龍をつけたる鉾。平家物語に「丈床の下には五丈の龍竿を立て」云々。**りうーやの雲居** 阿房宮賦に「長橋卧波、未雲何龍、複道行空、不霽何虹」とあり。**恩ひ立つ** 主つに載つて会ひて、旅衣をいひ、主つに朝、朝の雲、雲の旅と續く。**山遠らーては** 和漢朗詠集紀齊名の慈賦「山遠雲埋行客路、松高風破旅人琴」を引く。**轅門** 軍陣の意。古く王者が車を並べて陣を作る時、轅（車の長柄）を向ひ合せて門とせしに出づ。**石に立つ矢** 史記李廣傳に「李廣爲北平太守、常出獵、見草中石以爲虎、而射之、中石没鏃、視之石也、因復更射之、終不能復入石矣」。此故事を引きて、矢をやたけ心に擬く。**やたけの心** いよ〳〵勇志心。**遠山の雲に** 遠山は山の名。**燕の國** 周の侯、召公奭の封地。召公奭より王喜まで三十六代。王喜の太子丹にて七代。**秦舞陽** 燕の勇士。**高札の表に任せ** 平家物語には「始皇四海に宣旨を成し下し、燕の指圖、並に樊於期が首を持て来りたらんずる者には、五百斤の金を與へんと被露ぜらる」とあり。**燕の指圖の箱** 史記に「得樊將軍首與燕督亢之地圖奉獻秦王、秦王必說見臣」とあるを、平家物語に指圖と書きたり。指圖は地圖。**樊於期** 秦の時、罪を得て燕に逃く。平家物語に「荊軻、樊於期がもとに行きて、われ聞く、秦が首われに借せ、取つて始皇帝に奉らん、喜びて叡覽を歷られん時、劒を接いて胸を刺さんは易かりなんといいければ、樊於期踊り上り、踊り上り、大息つい夜晝これを思ふに、骨髓に徹つて忍び難し。滅に始皇帝討つべからんに於て、わが首を與へんこと塵芥よりも易しとて、自ら首を切つて死に、けるとあり。此事史記にも出づ。**御天法公なる法規。** **節會の儀式** 節會（朝廷の儀式宴會）の儀式通りの作法。**薄氷を踏む** 詩經「戰々兢々、如履薄冰」。**身體わなゝき** 平家物語城方本に「かーこに玉のきざはーあり。秦舞陽これを昇る花に膝ーてもやありけん、膝の節わなゝくとふるつて昇りわづらふ。臣下怪みをなし、舞陽は謀叛の志あり。君子は刑人に近づかず、刑人をば又君の傍に置かず（平家物語本ー近づけは即ち死を輕んずる道なり）といひければ、荊軻主ち帰つて、舞陽は謀叛の志あーー。燕の國の殘ーきにならつて、かゝるる皇帝を初めて見る間遠慮すと云はれて、臣下左ーーづまり如。今ぞをーーて」と注へるは、もと「身體わなゝきて、をくーて昇りかねてぞ」とありーを誤り傳へるなるべー。**責礫に** 平家物語長門本に「荊軻覺られなんすと驚きて中ーけるは、龍頭之所始、蛇尾之所終と云ひければ、兵ども荊軻にけり」。作者の據りー本にも此法ありーなるべー。此句和漢朗詠集に出づ。上句の意は、小石多き河原のみを見慣れて、深淵を窺はざる者は、珠を含む龍の潛める樣を知らずとなり。ここは野人の九重の雲深き所を測り知らざるに喩ふ。**てんごく** 詩書に見當らず。典籍の字なりと云ふ説あれど、如何あらん。**胡床** 用ゐざる時は疊み置く椅子。**期したる** 豫期ー たる。**むんずと** むずを延へたる詞。勢はげーく手を掛けたる組。越方本に「御衣の袂をむんずと捉へ奉つて」。**聖人人にまみえず** 前に引ける平家物語の文「君子は刑人に近づかず、近づけば即ち死を輕んずる道あり」と云へり」とあるを云ひ更へたるなるべー。此法公羊傳の襄公二十九年の條に出づ。**花陽夫人** 平家物語に「秦始皇帝は三千人の后をもち給へり。其中に花陽夫人とて、雙なき琴の上手おはーーき」とあり。これは史記索隱に「秦王曰、今日之事、從子計耳、乞聽強而死、召姬人鼓琴」とあるを混同ーて始皇の后の事とーて作りーなり。**片時** 暫らくの時間。**黄泉** 黄泉好手也」とあるを混同ーて始皇の后の事とーて作りーなり。

は人の死して行く場所。その道を先ぶんと思ふと作れるは誠に。長門本に此時始皇「たゞ臨終の妄念になりぬべきぶ一み残れり」と歎きて、第一皇子の琴を聞かんとしたることを記せり。ここに黄泉のみちとあるも、もと黄泉の妄念などの意に作られし辭句を誤り傳へしにや。

手籠　篭力を以て捕へ抑ふること。

今はの玉の緒琴　今は最期の玉の緒（命）といふを小琴に掛く。

和風樂、柳花苑　共に唐樂雙調（春の調子）の樂名。

同じ曲の囀り　和風樂を一に春鶯囀と云ふにより重ねて云へるにや。月の前の調は　月の前に奏するものは、秋風樂ととなる。秋風樂は雁をいふ。

琴柱に落つる聲　鳴く聲より淚をそひ、淚の露の玉といひかけ琴柱を雁行と見たて、その爪音を雁の聲と見たて、云ふ。

淚の露の玉章　玉章に續け、暗に旅雁に托して文を使へ蘇武の故事にことよせ、人知れず始皇に意を傳ふる心を述べたり。

調を改めて　調をかへて更に弾き始むるなり。

七尺の屏風は　云々　長門本に「楊々の紅曲今は限と聞き給ひて心細きことぞ限なし。さて撥り方に、七尺の屏風もそどらば越え つべし、羅穀の袂も引かばなどかきれざらんといふ曲を度々弾き給ひけるに」云々。これはもと燕丹子に「召姫人鼓琴。琴聲曰、羅穀（織物の名）單衣、可裂而絶、八尺屏風、可超而越、鹿盧之劒、可奪而拔」とあるに出でたるなり。羅穀は薄き絹。今「袂も」と誤へる「を」字は「タモト」の引音の本文中に誤れ入りしものなり。

有無に醉へり　聞き醉ひて有無を辨へぬこと。

聖人　始皇を指す。

荆軻は聞き知らで　云々　荆軻は七尺屏風の曲の意を知らざりしなり。長門本に「荆軻舞陽二人の臣下は、管絃の道や疎かりけん妓曲を聞き知らず」。

鯨々と　うつらくと。

電光の激するよそほひ　白樂天琵琶の爪音を形容して「大珠小珠落玉盤」と云へるを偖る。

關干　經横に走り殺

番の醫師　御殿に在りし當番の醫師。

四、五番目
畧脇能

十月

シツレ　花陽夫人
ワキ　秦始皇
ワキツレ　荆軻
ワキツレ　秦舞陽
大臣　狂言　官人

咸陽宮

始皇上　真之夾序　打上

抑とも咸陽宮と申さゝ。都のまもり一萬八千三百餘里　内裏は地より三里高く。雲を凌ぎて築きあげて。鐵の築土方四十里　始皇又は高さも百餘丈。雲路を渡る鷹も。鷹門しおくては過ぎがたし　地木内よりも十六宮あり。眞

●小謠

珠の砂瑠璃の砂。黄金の砂を地よハ
敷き　拍子　長生不老の日月まで。萬代を
並べて　移り　地　帝の宮殿ハ所厚宮。
銅の柱三十六丈　拍子　東西九町　地　南北
五町　拍子　五丈の幡竿　地　りうしやの雲居
さ　拍子　ぐら天よ　地　飄り　地上歌　登れば玉の
階の。打切　登れば玉の階の金銀を磨きて

荊軻　秦舞陽　斬　全二　一声

輝けり。唯　月の影を踏み蒼天を
渡ることち。　千　上　元　不　月の影を踏み蒼天を
とおやおのく　肝を消　肝を消
風かな　荊軻上　山　荊軻上　秦舞陽　遠　元又
跡を埋み　荊軻　高　元又
夢を破る　荊軻　たそひ轅門ハ高くも

秦舞陽

思の赤ハ　荊軻　宮よ立つ　荊軻　秦舞陽ニ上歌　やたけの心
あらそはして。やたけの心あらそはして。素足
山の雪よ日を重ね。やうく行けば名も
高き。咸陽宮よ著きよけり咸陽宮
よつきよけり　荊軻　急ぎは程よ。咸陽宮よ
著きて。まづ秦舞陽申さるるまでは。
いろよ秦舞陽申は。燕の國の傍よ。荊軻

秦舞陽と申まで。兩人の者。高札の表よ
任せ。燕の指圖の箱。並よ樊於期ど
首を持ちてこれまで。系内申しては　狂言
何と申まで。燕の國の民よ。荊軻秦舞　大臣
陽と申まで。兩人の者。燕の指圖の箱。
並よ樊於期ど首を持ちて系内したる
と申まで。知るめでたき事とて無けれ。

やがて秦開申しゐべし。いらは秦開申は。
燕の國の民よ。荊軻秦舞陽と申せ
兩人の者。燕の指圖の箱。並ら樊於
期ゞ首を持ちて唯今系内申しては
始皇「何と燕の國の傍ら。荊軻秦舞陽と
申せ。兩人の者。指圖の箱。並ら樊於
期ゞ首を持ちて系内したると申せか

大臣「ざんば始皇「急いで系内させゐへ大臣「畏つて
ては。唯今の由を秦開申してあれば。
急いで系内させよとの宣旨まであるぞ。
さりながら居大法の如く。太刀如たかを
泄預かりゆへ」狂言「いらは秦舞陽。荊軻
太刀如たかを系らせよと。仰りゐゞ。何と
秦舞陽「居大法「仕ゐべき

居大法あそいもど。
直系らせられいへ

荊軻

らんとへ　さらば、系らせりぎるまでの　注言

荊軻上

荊軻ハ佩劒を解いて威儀をあ。

節會の儀式よ従ひて。雲上遙よ見

秦舞陽

渡せど　金銀珠玉の古階を踏み。

荊軻

三重ゞ向を登り行けば　薄氷を踏

秦舞陽

むごとして。荊軻ハ既よ登れども

後よ立ちたる秦舞陽。身體わなゝき

手をとして。登りかねてぞ休らひける

荊軻行

あゝ不賢なりとよ秦舞陽。燕の賤

しき住まひよあらずして。玉殿を踏む

カん上

恐ろしさよ。臆してよりかねけるら

秦舞陽行

それをおさのみ諫め給ひそ。其積礫

よ習ひて。玉淵を窺やるに。驪龍の

地上

幡る所を知らぬ。合フげよ理ととてん

おくに。さても嚴しき禁中より轅門を解いて許しけり。轅門を解いて許しけり（大臣上）帝（不合）いとをを向としめ。臨時の節會を執り行ひ。燕使の系図を待ち給ふ（荊軻）舞陽荊軻は大床の胡床より系著申しけり（秦舞陽）まづ秦舞陽進み出でて。樊於期が首を白玉帝の上覽に供へ奉ちのけぞ（大臣）帝は笑めるが如く氣色。御心も解けて見え給ふ（荊軻）其時荊軻進み寄りて。燕の指圖の箱の蓋を開き。上覽（カミ上）に供へ奉ちのけぞ（妹皇行）不思議やな箱の底より劔の影。氷の如く見えければ。既（カミ上）に奉ち去り給ちん（地上）とて（合フ）荊軻は期したる事なれば。怪（ヤ）

の袖よむんぎと縋つて。紙を胸よ
さ（花陽美人）あて奉りけり（ミラク）淺ましや（ヒイラン美人）
人よまみえぎとと。今此時よてありけ
るぞや。あら、淺ましの所事やな

始皇帝
いろよ荊軻。秦舞陽もだ一なよ向け。
われ三千人の后を持つ。其中よ花陽
ま人とて琴の上手ありされば毎日
怠る事なり。然れども今日は汝等が案
内よりも未だ琴の音を聞かぬ。猛更
今は最期なれば。片時の暇をくれよ。
かの琴の音を聞いて。黄泉の道をも
免れぬると思ふいろよ

荊軻
いろよ秦
秦舞陽
とれ程
舞陽。さて何とあるべきぞ
まで手を能め申さて上へ。片時の所暇な

らば、糸らせられゆへ　荊軻　「さらば、片時の
間、暇を、糸らせよりぞ。」　始皇　「いとよ。
花陽夫人。急ぎ、秘曲を、奏し、給へ。
花陽夫人　「さらば、秘曲を、奏でべし。もとより、妙なる
琴の音よ。飛び鳥も、地に、落ち、武士も、
和ぐ、程の、秘曲なれば、まして、今、宮の
御前、そは、手も、盡され。

●獨吟琴ノ段ト云フ

武士も　トモ

けめ。　地上　「花の春の琴、曲は、和風、樂よ。
柳、花、苑、柳、花、苑の、鶯は、同じ、曲の、囀。
月の、前の、調は、夜、寒を、告ぐる、秋風、雲
居よ、渡れる、鴈、琴、柱に、落つる、聲ぐ
も、涙の、露の、玉、章。たまさかよ。たまさ
かよ。人、いとも、白糸の、調を、改めて、君、陶
けや、君、陶けや。七尺の、屏風は、躍らず。

二三返ノ傳ニテハコノ所ヲ繰リ返シ謡フ

越えつべし。西維穀の袂をもとらかば、
どか切れざらん。謀臣か有無を醉へり
羣臣か聖人の。助けと。あり返し。
地拍子
あり返し。（ト）おし返し
又
本文ノ通リニテモ地拍子板ヒハ右ノ通リニ近ク
おり返し。（ト）こと返しの琴の音を君か聞
こしめさるれども荊軻か聞き知らで
唯緩くと。（ト）侵されて。眠れるか如くあり。（ト）×
時移る時移ると。（ト）秘曲度く重なれば
×たゞねむれるごとくあり
コヽニテ止ムル時ハ此返シヲ謡ノ習事ナリ
時移る。時移ると（ト）

姑皇
地
荊軻ぐ控へたる　庄　衣の袖を。（ト）引つ
地拍子
荊軻ハ
切って。屏風を躍り越え。電光の。激
もるよそほひ霰の白玉盤より落ち
て東平を走るごとくして。銅の門柱
よりも隠れさせ給ひしかば　荊軻ハ
怒をなして　地　剣を帝よ投げ奉れば。（ト）
番の醫師ハ。薬の袋を剣よ合せて

地拍子
萬歳を保ち給ふ事

投げ出すべけれバ　帝（始皇）また劔を抜いて、帝（地）また劔を抜いて。荊軻も秦舞陽をも。八裂き給ひ忽ち失ひおもうまし。其後燕丹をもとも。程なく滅し秦の古代萬歳を保ち給ふ事。唯これ居の琴の秘曲。ありがたかりけるなり。

解題

東岸居士の傳、及び一遍上人の法語によりて、居士が狂言綺語に事寄せ清水寺の花下に佛道を説くことを作れり。今はシテ一人なれど古くはツレとして、西岸居士も出でたりしか、此曲中の文と、異曲同工なる古曲西岸居士とによりてしか思はる。能作者註文、二百十番謠目録に世阿弥の作とせり。

謠ひ方梗概

自然居士よりも住乞食物といひ、普通の男物とし異り、淡味を帯びて瓢逸の気韻を含み、一種特殊の趣あるものとす。

シテ　僧俗の境に在る修験者なれば、一体にひねくれたる雷あり。落付好く確りと、然も重くならぬやう心して宜しく器達ならべし。一声はさっぱりして声を抑ふる事なく、確りと出て稍さらりと扱ひ、**ワキ**との問答意気軒昂の気を宜しくとす。「こと新しき問ひ事かな」此詞ははっきりと出て確りと言ひ、「柳は緑花は紅」とさらりと、「あら面白の」と気を抜いて、「春の気色やな」と むつくりと謠ふ。以下さらりのに謠ひ、**掛合**はかゝつて承け應ふ。「げに〳〵これも」云くはさらりと出、「讃佛轉法輪の〳〵」と確り、「いざや鼓はんこれとても」とかゝつて謠ひ地へ渡す。「面白や」は一声の調子にて鷹揚なるべし。「鉢に又申さく」はクリの調子にて確りと、**サシ**より さらりとなり。クセの**上端**は確りと扱ふ。**物着後**「面白や」云くは心機を一轉して晴れやかに大きく、以下**掛合**は淀みたるく爽やかにおもしろをかしき風情なるべく、「百千鳥」は**ワカ**なれば大きく確りと謠ひ**地**と**掛合**はカケてさらりと、水の流るゝが如き中にも趣あちやうに乗りよく扱ふ。「何と唯」は往確り と謠ひ納む。

ワキ　佐寺常に、はきと扱ふ。

地　初の「東岸居士の」云くは力ケる心まて出て、確りとしたる感を運法の舟の」は、次第の調子にて往を大きやかに取り、稍寛りと謠ひ、以下クセまでさらりめなれど確りと扱ひ、「行くは白河」以下シテ特述開拓の至難なる事を述ぶるものにて、運びはさらっめなれど確りと扱ひ、「行くは白河」以下シテの意気軒昂と相俟つて極めて朗かにすらすらと謠ひ、返しを稍緩めて納む。

注意すべき謠ひ方

四段表の「妄念なれども」の「ども」の前附　「下下下下」は下の如くに謠ふべし。

青屋を下ぐることなく、上廻し（ウハマハシ）に扱ふ。又、段の表より裏へかけての

東岸居士

辭解

松をさへ 云々　松までも落花に蔽はれて橋本の如くなり、花に松風の声すとの意。

東岸居士 傳に云ふ「東岸居士は自然居士の弟子僧衣を被ずして高座に登りて説法す、或は羯鼓を撃ちて踊躍し、或は扇を敲て舞ふ。人誘つて剃髪せず緇衣を着ざる故を問へば辛然として曰く往て来る住所もなければ出家の謂れなし、出家に非ずんば僧衣を被ず、髪は長く乱れども特り自ら道に入る。東岸の柳を以て帛となし智解の座を掃ふと。問ふ者口をつぐんで言はず。弘安六年癸未の夏寂す」と。

光悦本 光悦本（慶長年中の刊行に係る謡曲目録初の版本）には此一声の謡に続けて、サシ及び上歌の二節あり。慶長頃までは謡ひしものと見ゆ。「サシ　それ浮世の常無き事、電光朝露も猶喻へ難く、人間有為の世の有様、芭蕉泡沫亦同じはかなかりける世の中かな　上歌　めぐる日影もふ車の道をさだかに白河の、心にかけて掲橋、起居隙無き心かな」。次のワキの謡は今本に同じ。

萬事は皆目前の境界 観ずれば萬事皆目前の境界を出でずとの意。山姥の謡にも「萬事目前の境界」とあり。

柳は緑、花は紅 天真爛漫の状にいふ禅家の常套語。禅林類聚経教草に「海印信云、見不反聞、江山満目、不親識臺、花紅柳緑、白雲出没本無心、江海滔々豈亟論」。蘇東坡の詩に「柳緑花紅真面目」。山姥の謡にも同語あり。

自然居士 和泉の人、初め法相を学び後禅宗に入り南禅寺大明国師の弟子となり、東山雲居寺に住す。膳餘雑録に「自然居士は東岸居士の師なり、此二人首を髫せず緇を被ず空平に袈裟を着く、或は高座に登りて説法し或は羯鼓を撃ち編木（ササラ）を磨り扇を執つて舞ふ。愚昧の者をして仏道に入らしむるの多端なりと。之餘の東白川の橋は此自然居士のなすけたるものなりと伝ふ。居士のことを作れる謡に自然居士あり。

法界無縁の功力 法界とは宇宙一切萬有を總括するの語。此法界中の仏縁なき衆生を救済せんとする功徳力用をいふ。

今亦かやうに勸む 無縁の衆生に仏縁を結ばしめんが為に今亦浄財寄附を勧誘するなりと。

東岸西岸居士 下に引く東岸西岸居士と共に自然居士の弟子たりしなるべし。古廣曲の西岸居士として作れりしには非るか。しかも解題に載せたる能作書（世阿弥）の引文の如く雖又び林せられたる曲にもあれば、それと此句と思ひ合するに古く此曲はシテを東岸居士ツレを西岸居士として作れりしには非るか。さすれば後の舞は相舞なるべし。

しより来る所 云々　東岸居士の傳に「無往来之住所、莫出家之謂、不在出家、不被僧衣」。

東岸西岸の柳 云々　和漢朗詠集に「東岸西岸之柳、遥遥不同、南枝北枝之梅、開落已異」とあるを特用し、柳髪の語あれば傳の「髪は長く乱る」に続け、下句は梅花の開くを法の為に心の開くに掛く。

彼岸 云々　橋を渡りて對岸に到ると生死の海を渡りて涅槃の彼岸に到ることを兼ぬ。

狂言綺語 云々　白氏文集に「願以今生世俗文字之業、狂言綺語之過、特為當来世々讃仏乗之因、轉法輪之縁」（朗詠集にも出づ）より借る。狂言は戯むれ言、綺語は虚飾の語。

讃仏 仏の功徳を讃数称揚することを障害を破碎して進むに喻ふ。

轉法輪 仏法のよく一切の煩悩を破碎する輪宝のよく一切の障碍を破碎して進むに喻ふ。

御法の舟 云々　涅槃経に「乗大涅槃大乗宝船周旋往返清度衆生」とあり。衆生を渡りて涅槃の彼岸に達せしむる法を船に喻へ、仏の水剃棹、法彼岸に到らん」までを居士の教ひし歌と見るべし。

胡蝶の夢 云々　荘子に荘周夢に胡蝶となりしの寓話あり。今も夢の内なる胡蝶の如く夢の浮世に面白く遊び戯れ舞はんとなり。

欽 抄録ぬきがきの義、仏者の註釈書類多く欽の字を用ふ。今次の一遍法議を指すか。

申さく 申すやうと云ふに同じ。

圓々圓成の道 法相宗の所説なる三性の中に圓成実性といふことあり、圓満成就真実なる本体の義なり。楞厳経に「発意圓成一切衆生無量功徳」とあり。有らゆる仏法は何れも衆生をして圓満成仏せしむる道なりとの意か、或は圓満無缺の教法の義に用ふる圓乗か。

心像、末法 釈迦入滅後の仏教流布の時期を正法像法末法の三期に分つ。正法は五百年。仏日の餘光猶強くして証果を得る者も多かりし時期。此正像の二期既に書きて末法に生を受けたるを数き云へり。末法は一万年間。教法有れども修行者無く随て証果を得る者絶無なりと説かれたればなり。

春過ぎ秋来れど 云々　此より以下「終に湿めす事なし」まで一遍上人語録中にある「或人法門を尋ね申けるに書て示したまふ御法語」の大半なり。

出離の道 生死の迷界を離れ出で、涅槃の悟界に入る道。

妄念 虚妄の思念。

煩悩心 煩悩は情欲なり、衆生本有の心性即ち本覚真如の実体を敬ふものなれば之を日光を遮ぎる雲に喩ふ。無明も亦煩悩のことにて其本体を敬うて明了ならしめざるを忘よりいふ。

無明

罪障の山 罪悪は善果を得るの障害となるを以て罪障といふ。罪悪の堆積せるを山に喩ふ。

煩悩の雲、真如の月 真如は一切萬有の本体にして衆生が成仏の標的となり迷妄を破るの功用あるを以て之を月に喩ふ。

苦に苦を受け重ね冥

より冥に趣く 無量寿経に「悪人行悪、従苦入苦、従冥入冥」。北無常の轉変は夢幻か現実か、実在といへば死して雲烟の如く消えて跡なし、虚無といへば死して恩愛悪衰の念猶残留すと。**芝蘭の契** 孔子家語に「無善人居、如入芝蘭之室、久而不聞其香、即與之化矣」とあり、よき善友の交をいふ。**骸を云々** 親友の死に對して歳寒悪歎の情は熱烈なり。**紅蓮、大紅蓮** 共に八寒地獄の一。紅蓮地獄にては能寒の為身体壊裂して恰も紅蓮の花瓣の如しとなり。大紅蓮(地獄)は其一層熾烈なるもの。**鴛鴦の衾** 夫妻同衾の親み。**眼をば云々** 夫妻の死別には各悪みて萬解の涙を流すも、これを以て八熱地獄の火を消すこと能はずとなり。朋友も夫婦も死しては地獄の苦を救ふ能はざるをいふ。**焦、熱、大焦熱** 共に八熱地獄の一。焦熱は獄火熾にして罪人を焦熱し其苦痛堪へ難きが故に名く。大焦熱は其一層熾烈なるもの。**殺生云々** 以下佛の戒めたる十種の悪を挙ぐ。殺生は生物の生命を断つ悪。**偷盗** 他人の所有物をぬすみとる悪。**邪婬** 不正なる婬事の悪。**妄語** 虚言の悪。**綺語** 飾り語の悪。**悪口** 罵詈讒謗の悪。**両舌** 二枚舌をつかふ悪。**貪欲** 能くことを知らずに貪る悪。**瞋恚** いかりの悪。**愚癡** 事理を解せざることの悪。衆惑の根本とす。**身に於て、口に於て、心に於て** 十悪は身に係るもの三、口に係るもの四、心に係るもの三。これを身三口四意三といへり。**羯鼓** 二枚を持として打つ一種の鼓。**波の鼓風のさゝら** 波の音を鼓に、風の声をさゝらに見常つ。さゝらは竹のさきを割りて造れる一種の古代楽器。四楽などに摺りて拍子をとりしもの。**打連れゆくや** 鼓さゝらをうつと人々の打連れ揃を渡るに掛く。**玉衣の云々** 萬葉集に「玉衣のさゐ〳〵しづみ家のいもに物言はずして思ひかねつも」(作本人麿)とあるを借る。玉衣は珠玉を飾りたる衣、さゐ〳〵はきやぎ〳〵、しづみは鎮のなり。原意は夫の遠行を妻の嘆き騒ぐを鎮めんとなるを、茲には「しづみ」を浮流の流れに轉用し、更に浮波と續けたり。**八撥** 羯鼓を打ち方より呼びたる名。八撥子に打てばなり。**百千鳥云々** 古今集春の部、讀人不知の歌。**極楽** 西方浄土。佛徳を讃歎稱揚する聖衆。ここには東岸居士の歌れ舞ひながらまを説くを歌舞の菩薩の御法といへり。**南無三寶** 佛法僧の三寶に帰依すること。いつの頃よりか俄に失錯したる時に發する驚きの辞に用ふ。しまったといふ如し。**笛、篳篥** 共に吹き鳥す楽器。**絃管** 絃は糸を弾ずる楽器。管は笛類の楽器。**極楽のお菩薩** 古き諸本は皆「極楽の菩薩」とありて、「の」は光悦本は「の」の節をつけ、寛永本は「ゝ」の節をつけたり。是を今は原音と毋音との間に句を切りて別に意ふため「お菩薩」となりたれど「御菩薩」の意に非ず。**萬法皆一如** 平等門よりいへば萬法即真如にて字宙間の一切萬有は皆一体なりとの意。**雲や氷と隔つらん** 「いかなれば雲や氷と隔つらんとくれば同じ谷川の水」といへる古歌を引きて萬法一如を説く意、実相は宇宙萬有の真実の体相なり。**實相の門** 實相の法門の

一遍法語抄録

或人法門を尋ね申けるに書きて示したまふ御法語

(括弧の中に諸文に於ける変化を記して對照せしむ)

春過ぎ秋来れどもすゝみ難きは出離の要道(みち)、花を惜み月を眺め(見)ても起り易きは輪廻の(三字落曲に無し)妄念なり。罪障の山にはいつとなく煩悩の雲あつく(う)して佛日の光眼にさへぎらず(晴れがたく)、生死の海には常時に無常の風烈しく(とこしなへに無明の波荒し)して真如の月やどる事なく(やどらず)。生を愛くるにしたがひ(まかせ)て苦しみ(苦)に苦しみを重ね(受け重ね)、死に帰する(帰へる)にしたがひて冥きより冥き道(二字無し)にむもむく。六道の衢には速はぬ雲もなく、四生(生死)の廠にはやどらぬ栖もなくし。生死(の)轉変をば夢とやいはん(又)現とやいはん(せん)、これを有(らあり)といはんとすれば雲とのぼり烟と消えてむなゝき空に影をとゞむる人(後其時と留むべくも)なくし。無(し)といはんとすれば又恩愛(の中)別離のなげき(六字なし)心の内に

（三字無し）とゞまり（つて）腸を断ち魂をまどは（動か）さずといふことなるし。彼芝蘭の契の秋に（は）扉をば慈歎の炎に焦せども紅蓮大紅蓮の氷は解くる事あらぐからず（をば特に解むすことなるし）。鷲鷲の金の下に眼をば慈悲の涙にうるほせども焦熱大焦熱の炎はしめることなかるべし（をば特にしのすことなるし）。

四番目
畧二番

東岸居士

三月　シテ　東岸居士
ワキ　旅人

ワキ詞「これは遠國方の者にて候。われ此程都より下り候たるを、一見仕りて候。又今泉清水寺へ参らばやと存じ候。松をきく。皆櫻ぞ散り敷いて。花よ聲ある。嵐かな」

ワキ詞「これは承り及びたる東岸居士にてわたりはべり。さて

今見いらやまある聽陶の居屋ゆゑ
とて新しき問ひ事かな。聽陶とい
つて。萬事は皆目前の境界なれば。
（カゝん上）柳は緑花は紅。あら面白の春の氣色
やな（ロキ行）あら面白の答やゞ。さて此橋は
いらるゝ人の架け給ひたる橋ゆゑ
とこれは先師自然居士の。法界無縁の
（シテ）

功力を以て。渡し給ひし橋なれば。
今又かやうに勸むるなり（ロキカゝん上）さてく
東岸西岸居士の。郷里はいづくいら
るゝ人の。父母を離れ居出家ぞや
（シテ行）むつかしの事を問ひ給ふやもとより
きたる處もなければ。出家といふべき
いはれもなし。出家よあらねば髮をも

剃らぬ。衣を墨染めもせで。唯おの
づから道よりて　善を見ても
進まず　智を捨てても　愚からぬ
ちりよりふれ　塵よ渡りて白川よ
聽れる橋い　西　東の　地上　東岸
西岸の柳の。髪は長く乱るとも。夫南
枝北枝の梅の花。開くる法の一まぢよ。

渡らん為の橋なれば。勧めよ人々
かの岸へ到り給へや。　又いろもの
如く歌うて　戸閉うせろく　げよく
これも狂言綺語を以て。讃佛轉
法輪の眞の道よ　ものるおれぞ。人の
心の花の曲。いざや歌そんとこれとても
地次第上
此法の舟の水馬掉。此法の舟の水

駒掉。皆かの岸より到らん　シテ上　面白や。
これも胡蝶の夢のうち　地　遊び戯れ。
舞ふとやや　中ノ舞　打上　シテクリ　剣より申さく。あら
ゆるところの佛法の趣　地　箇〻圓成の
道をぐよ今より絶えぬ跡とやや
シテサシ上　サシクセ獨吟　但し、心像観より暮れて。未法より生を受
けたり　地　かるがゆゑ春過ぎ秋来れ

●仕舞

ども。進み難きい出離の道　シテ上　花を惜
み月を見ても。起り易きい妄念なり
地上　罪障の山はいつとなく。煩悩の雲
あつうして佛日の光晴れ難く
シテ上　生死の海はいとこしなへよ　地　無明の波
荒くして。眞如の月宿らぬ　打切　生を
受くるよ仮せて。苦よ苦みを受け重ね。

地拍子配り方ハ本文ヲ左ノ如ク取ラバ解シ易シ

雲と昇り煙と消えて後

（拍子當リハ同ジ）

死よ帰るよ隨つて。冥きより冥きよ
迷ふ。六道の巷よ。迷はぬ所もなく。
生死の樞よ。宿らぬまどもなし。生
死の轉變をぞ。夢とやいはん。又現
とやせんこれら有りといはんとまれば。
雲と昇り煙と消えて後其跡を留む
べくもなし。いはんとまれば又恩

愁歎の

地拍子扱ヒ

紅蓮大

地拍子扱ヒ

焦熱大

愛の中。心留まつて。腸を断ち。魂を
動かすぞと云ふ事なり。かの芝蘭の
契の袂よ。屍をば愁歎の煙よ焦がせ
ども。紅蓮大。紅蓮の水をば絶よ解か
ま事なり。鴛鴦の衾の下よ眼をば。
悲悲の涙よ洞せども。焦熱大。焦熱
の焔をば。終よ温ま事なり。かくる拙き

地拍子
妄語綺語

身を持ちて　殺生偸盗邪淫ハ
地　身よりおこして作る罪なり。妄語綺語悪
口両舌ハ。口よりして作る罪なり。貪欲瞋
恚愚癡ハ。心よりおこして絶えせぎ古
法の舟の水馬棹。皆かの岸より到らん。
早拍子　とてもの事ゆへ
物著　面白や松吹く風颯々として。

波の聲花ゝたり　所ハ名ゆ負ゆ浦
陽の。眺も近き白河の　浪の鼓や
風の笛　早カケ上　うち連れ行くや橋の上
シテ　男女の往来　早　貴賤上下の　袖を
つらねて玉衣の。さゝく波ゝ沈み浮き
波の笛ハ撥打ち連れて。百千鳥
シテ上　百千鳥。囀る春。物ごとに
鶴鼓　地中　改まれ

●仕舞

（中）ぞ。われぞさりゆく（シテ中二）行くえ白河の。（地）橋を隔てて向ひて（シテ）東岸（地）こなたは（シテ）西岸（地）すぐ波は（シテ）絃（地）うつ波は（シテ）鼓（地）どれもいづれも（シテ）樂の。（シテ）舞の菩薩の（シテ）法とぞ。（シテ）聞きは知らぬ（シテ中）白や（シテ中）おゝ南無三寶（地上）げに古鼓も

羯鼓も笛笙管ともよ。樂の。（地中）お菩薩の遊と聞くものを（シテ中）何と唯（地中）何と唯雪や氷と隔つらん。萬法皆一（シテ）如なる實相の門よ入らうよ。實相の

270
455

大正十年八月十四日印刷
大正十年八月十八日發行

觀世流改訂謠本
第四版・大正版

訂正者故 丸岡桂
捆債者 丸岡明
東京市神田區今川小路三丁目九番地
發行者 土屋源太郎
東京市神田區東松下町十二番地
印刷者 鈴木彌作
東京市神田區東松下町十二番地
印刷所 信英堂印刷所

滿洲國所有權許可

發行所 觀世流改訂本刊行會
東京市神田區今川小路三丁目九番地
電話九段 二三〇五番
振替東京 一三四七五番

終